

富山県上市町

弓庄城跡

第4次緊急発掘調査概要



1984年3月

上市町教育委員会

序

昭和58年度の弓庄城の調査は二の丸の一部、本丸の南側の郭で行なわれ、多数の掘立柱建物・井戸・堀・陶磁器・金属製品・木製品などが検出されました。このうち掘立柱建物は24棟を数え、井戸の中からは将棋の駒などが出土しました。これらは中世の生活・文化を考える上でたいへん貴重であり、上市町の歴史の一端を明らかにしてくれました。

このように、毎年着々と、調査はその成果を上げておりますが、これも県農地林務部・地元土地改良区をはじめ地元住民のみなさまのご協力のたまものであり、心から感謝申し上げます。また調査にあたり全面的なご協力をいただいた県教育委員会に対して厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月

上市町教育委員会

目 次

序	
例言	
I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
II 調査の経緯	2
第2図 地形及び区割図	3
III 調査の概要	5
1 C地点の調査	5
イ 2区	5
2 E地点の調査	7
イ 1区	7
第3図 E地点1区造構配置図	7
第4図 E地点1区造構図	8
第5図 SE015出土遺物	9
ロ 2区	10
ハ 3区	11
第6図 E地点3区造構図	12
3 F地点の調査	14
4 中山王窯跡群	16
第7図 中山王窯跡群造構配置図	17
IV 調査の成果	19
1 造構について	19
第8図 掘立柱建物概念図	21
表1 建物・権一覧表	22
2 土師質上器について	24
第9図 土師質土器分類図	25
3 中山王窯跡群について	26
第10図 県内瓦窯・須恵器窯分布図	26
第11図 弓之庄古城之図	27
引用・参考文献	28
図版1 C地点2区発掘区	
図版2 C地点2区出土遺物	
図版3 C地点2区及びE地点1区・3区出土遺物	
図版4 E地点1区発掘区	
図版5 E地点1区出土遺物	
図版6 E地点1区出土遺物	
図版7 E地点1区出土遺物	
図版8 E地点3区出土遺物	
図版9 E地点3区出土遺物	
図版10 E地点3区出土遺物	
図版11 E地点3区発掘区	
図版12 F地点発掘区	
図版13 F地点出土遺物	
図版14 F地点出土遺物	
図版15 中山王窯跡群出土遺物	
図版16 中山王窯跡群出土遺物	
図版17 中山王窯跡群出土遺物	
図版18 弓庄城跡・中山王窯跡群航空写真	
図版19 C地点2区	
図版20 C地点2区	
図版21 E地点1区	
図版22 E地点1区	
図版23 E地点1区・E地点2区	
図版24 E地点3区	
図版25 E地点3区	
図版26 E地点3区	
図版27 F地点	
図版28 F地点	
図版29 C地点2区	
図版30 C地点2区・E地点1区・E地点3区	
図版31 E地点1区	
図版32 E地点1区	
図版33 E地点1区・E地点3区	
図版34 E地点3区	
図版35 E地点3区	
図版36 E地点3区・E地点2区	
図版37 E地点3区・E地点1区	
図版38 E地点3区・E地点1区・F地点	
図版39 F地点	
図版40 F地点	
図版41 中山王窯跡群・A地区・B地区・C地区	
図版42 中山王窯跡群・A地区・B地区	

例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（上市南部地区）に伴う富山県中新川郡上市町弓庄館城跡の第4次発掘調査概要である。調査は2期に分けて実施した。第1期は昭和58年4月26日から同年8月10日まであり、第2期は昭和58年9月30日から同年12月20日までである。なお調査面積は第1期と第2期を合わせて8200m²である。
2. 調査は上市町教育委員会が、富山県農地林務部の委託を受け実施したが、地元負担金については、上市町教育委員会が国庫補助・県費補助金を受けた。また、調査にあたっては富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 調査事務局は上市町教育委員会におき、また調査期間中文化庁記念物課・富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を得た。社会教育課主事広島丈志・同高慶孝が調査事務を担当し、社会教育課長荒川武夫が総括した。
4. 調査は上市町教育委員会社会教育課主事高慶孝、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井重洋・宮田進一・松島吉信（以上調査担当者）・神保孝造・橋本正春（以上調査員）が担当した。
5. 調査から報告書の作成まで、下記の方々より種々の有意義な指導・助言を得た。記して深甚なる謝意を表したい。
早稲田大学講師金子浩昌（入骨・動物骨）・富山考古学会会員京田良志（石塔・石佛）・同西井龍儀（窓跡）・富山大学研究生吉井亮一（植物種子）木材試験場研究員飯島泰男（樹種）
6. 木製品の赤外線写真撮影にあたっては富山県警鑑識課の協力を得た。
7. 遺物の整理・実測・トレース等は高慶・酒井・宮田が行った。造構の実測図は高慶・酒井・宮田・松島・神保・橋本が作成した。遺構と遺物の写真撮影は高慶が富山県埋蔵文化財センター職員の助言を得て実施した。
8. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の助言を得て、高慶・酒井・宮田・松島が分担して行い、各々の責は文末に記した。
9. 写真図版は基本的に1/3に統一したが、スケールの異なるものは注記した。
10. 造構には、SA：櫛、SB：建物、SD：堀・溝、SK：土塁、P：柱穴、SX：その他の造構などの分類記号を付記した。

I 遺 跡 の 環 境

弓庄城は富山県中新川郡上市町^{かずら}盆地内にある平城である。標高は40~60mで、白岩川によって形成された河岸段丘上にあり、富山湾を一望できる。本城は東側を山地に、西側を白岩川に挟まれた南北に延びる段丘上を利用して構築されている。本城の規模は、江戸時代に描かれた「弓之庄古城之図」（金沢市立図書館所蔵）と現在の水田の地形とから勘案すると、南北約600m、東西約150mになる。本丸を段丘の最上位に配し、その周囲を郭が幾重にも取り巻く構えである。本城内の水田下の粘土採取による瓦生産（10数年前まで操業）のため、遺構の破壊が所々にある。

鎌倉時代から滑川の堀江荘域を拠点にしていた土肥氏が、南北朝時代以降井見莊に進出し、白岩川流域に勢力を伸ばしてきた〔久保1983〕。戦国時代末期には弓庄城を拠点にした土肥氏は、堀江系の土肥氏と分離して柿沢城・若荷谷城を結城とした支城関係をつくる〔高岡1982〕。土肥氏の弓庄城築城はいつであったかは明確ではないが、これまでの発掘調査の成果から15世紀後半と考えられている。天正10年（1582）越中制圧を試みた織田方の佐々成政は、弓庄城の土肥政策を攻めるために日中砦・郷田砦を築き、翌11年に土肥氏を退城させた。

また、弓庄城跡の東側にある山地の山麓には中山王窯跡群がある。周辺には古墳時代後期の堤谷窯跡群（上市町）、奈良～平安時代の亀谷窯跡群（上市町）と上木窯跡群（立山町）とがあり、これらの窯跡群は古代の新川郡における須恵器生産の大拠点である。

（宮田）



第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査の経過

町指定文化財の弓庄館城跡（以下弓庄城跡）は、柿沢・館両地内にまたがる規模90,000m²の中世の城である。本遺跡は昭和53年度から昭和56年度までの団体営ほ場整備事業、昭和56年度から行われている県営ほ場整備事業の地内に所在するところから、城跡保存のための協議が、上市町教育委員会・富山県教育委員会（文化課・富山県埋蔵文化財センター）・富山県農地林務部（ほ場整備課・富山農地林務事務所）・地元土地改良区の4者により行われた。その結果、一部記録保存を含む現状保存の対策が講じられることになった。

1. 第1次調査（昭和55年度）

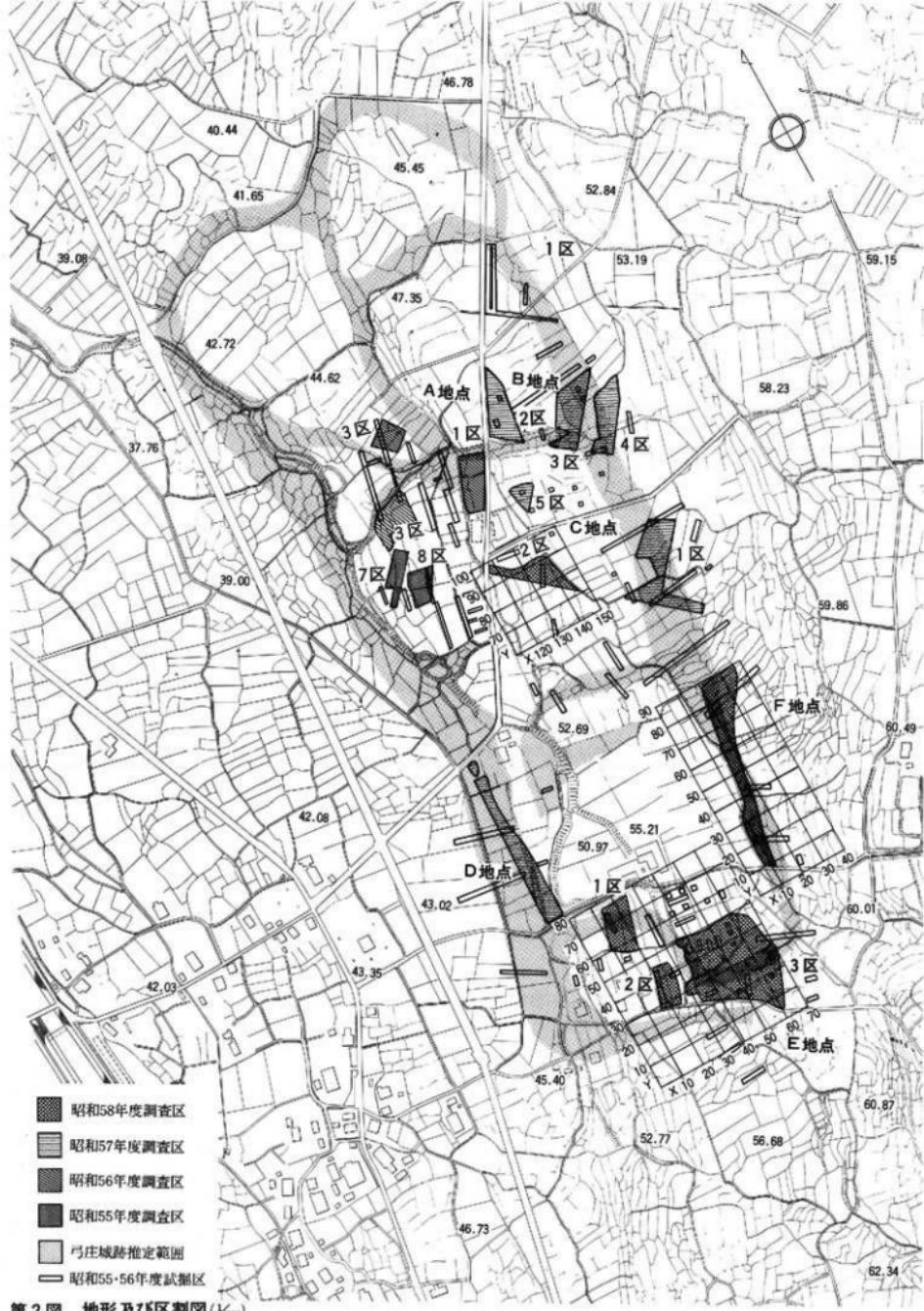
第1次調査は、団体営ほ場整備地区南側約30万m²を対象として行った範囲確認調査（第1期調査）と協議の結果、工事計画との調整を行いやむなく調査を実施した第2期調査に大きく分けられる。第1期調査では対象地区のほぼ全域で遺構・遺物を検出した。遺構では、堀・井戸・建物・溝・敷石造構を確認した。第2期調査では、建物・溝・橋・井戸・土塙を検出した。遺物では、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、越前、伊万里などの陶磁器類、土師質土器、中国製磁器を多数出土した。また溝SD02から甲冑の一部が出土し注目された。この調査区は『土肥家記』（有沢永貞著、金沢市立図書館蔵）の付図「弓之庄古城之図」（以下古絵図という）から西側外郭部分に比定される地域である。なお調査面積は、第1期調査、第2期調査を含め2,500m²である。

2. 第2次調査（昭和56年度）

第2次調査は、白岩川に面した河岸段丘上の約1,300m²を対象とした第1期調査と城跡の範囲確認を目的として行った第2期調査に分けられる。第1期調査は、第1次調査にひきつづいて城跡西側外郭部分に比定される地区の調査で、ほ場整備事業の施工上、記録保存を要する部分に調査区を設定し全域で遺構・遺物を検出した。遺構では、建物・井戸・土塙・溝、遺物では瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、中国製磁器が出土した。第2期調査では、城跡推定範囲の外堀を中心に、1×20m・1×50m・1×100mのトレンチ及び1×1mの試掘坑を設定し、それぞれで遺構・遺物の確認を行った。その結果、一部で瓦製作用の粘土探査のため擾乱を受けた部分があるものの、調査区内では、ほぼ全域にわたって遺構・遺物の存在が確認された。遺構では、堀、溝、井戸、建物、石垣、土塙、集石造構が検出された。遺物では、土師質土器、珠洲、瀬戸・美濃、越前、伊万里、中国製磁器などのほか、下駄・箸・機織具・漆器などの木製品、宋銭・明銭などの銅銭、小柄・鉄砲の弾丸などの金属製品が出土した。以上を総合すると城跡の遺存状況はきわめて良好であることが判明した。また、城の郭を復原すると（第2図参照）古絵図とほぼ一致することが明らかになった。これにより城の規模は、南北で約600m、東西で平均して150mとなり、約90,000m²の規模であることが確かめられた。

3. 第3次調査（昭和57年度）

第3次調査は、昭和56年度の範囲確認調査で地区割りをしたD地点、B地点2区・3区、縄文時代中期の館窓削跡を調査した第1期調査と、B地点4区・5区、C地点1区を調査した第2期調査に分けることができる。第1期調査では本丸西側のD地点で全長150mの土塁とそれとともにうな形、本丸から三番目の郭に比定されるB地点1区・3区で建物、井戸、溝、道路、集石造構を検出した。遺物では、土師質土器、越中瀬戸、珠洲、伊万里などの他、下駄人形、箸、ヘラ状の杓子、曲げ物などの木製品、小柄、かんざし、煙管、宋銭などの金属製品、石臼、るつぼなどの石製品を検出した。第2期調査ではB地点4区・5区、C地点1区で、建物、溝、井戸などの遺構を検出した。遺物では、土師質土器、越中瀬戸、珠洲、中国製磁器の他、下駄、ヘラ状の杓子、人形、火つき印などの木製品を検出した。中でもC地点1区では、龍泉窯系の青磁や木製品が多量に出土し注目される。なお調査面積は、第1期調査、第2期調査を含め約6,100m²であった。



第2図 地形及び区割図(%)

4. 第4次調査（昭和58年度）

調査は、昭和56年度調査で地区割りをしたC地点2区・E地点1・2・3区、F地点のうち、ほ場整備事業の施工の関係から削平を受ける部分についてのみ実施した（第2図参照）。また、ほ場整備事業の一貫として行われた用水改修工事に際して発見された。館中山王窯跡群についても、立ち合い調査を実施した（第7図参照）。調査は上市町教育委員会が、富山県農地林務部の委託を受けて実施したが、地元負担金については、上市町教育委員会が、国庫補助金・県費補助金を受けた。

C地点

C地点は、城跡本丸から二番目の郭に比定される地点で標高52m前後の平坦な地点である（第2図参照）。

2区 この地区は、調査地点西側を走る町道に面する地区である。検出された遺構は、建物5棟、井戸2基、溝2箇所であった。このうち溝は、本丸から二番目の郭と三番目の郭を区画するものと思われるもので、城跡復原の上で注目される。遺物は、土師質土器、越中瀬戸、越前、瀬戸・美濃、珠洲、伊万里、中国製磁器、鉄砲の弾丸、小刀などが出土した。

E地点

E地点は、城跡本丸南側の標高51mから60mの起伏を持つ地区で、菜洗場・曾祢と呼ばれる字名を持つ地点である（第2図参照）。

1区 この地区は白岩川右岸の河岸段丘直上の本丸南西の地区である。検出された遺構は、建物4棟、井戸10基、溝4箇所、石垣3箇所であった。このうち井戸は石組みが施されたもので深さ約2mのものである。遺物は、土師質土器、越中瀬戸、瀬戸・美濃、珠洲、中国製磁器、石臼、馬形、クシ、将棋の駒などであった。このうち将棋の駒は中世のものであり注目される。

2区 この地区は、1区の南東に位置する。遺構は瓦製作用の粘土採掘のため削平を受けていたが、遺物は、土師質土器、越中瀬戸、珠洲などが若干検出された。

3区 3区は、1地区的東側で城跡本丸の南側標高60mの平坦地である。検出された遺構は、建物12棟、井戸5基、溝7箇所、土塙である。このうち土塙SK 234などの土塙群は墓である可能性が強い。遺物は、土師質土器、越中瀬戸、瀬戸・美濃、珠洲、越前、中国製磁器、五輪塔、宝篋印塔、茶臼、宋錢、木製品などであった。

F地点

F地点は、城跡本丸東側の標高60m前後の地点で、古絵図の竜ヶ池の東側付近と思われる地点である（第2図参照）。この地区で検出された遺構は、建物3棟、井戸2基、溝7箇所などを検出した。溝は城の外堀に水を引くためのものと思われその取入口付近を確認した。遺物は、土師質土器、越中瀬戸、瀬戸・美濃、珠洲、中国製磁器、伊万里、須恵器、漆器の椀、柱根、かんざし、小柄、石製井戸枠などを検出した。このうち、かんざしは金属に漆が塗られているもので、花文が押されていた。

中山王窯跡群

中山王窯跡群は、弓庄城跡の東側の樹形山から連なる山地の麓、標高67mから80m付近一帯に所在する窯跡群である。これらの窯跡群は、その立地や窯の種類、時代からA・B・C・Dの各地区に区分割りをした。窯跡は須恵器窯跡3基以上、炭焼窯跡23基が確認されているが、山地一帯には、まだ数基の窯跡が存在するものと思われる。今回採集した遺物は、杯身・杯蓋・壺・甕・古瓦などである。このうち古瓦が検出された窯跡は、瓦陶豪業の窯跡と思われ注目される。その他、この地域では土師器が採集されており、古墳時代の住居跡などの存在も想定されるため、今後十分な調査が必要である。

（高慶）

III 調査の概要

1. C地点の調査

イ. C地点2区

C地点2区は、弓庄城推定地内のはば中央に位置し、本丸から二番目の郭に相当する。遺構では掘立柱建物や大溝が検出された。遺物はほぼ中世後半のものが大部分を占める。

遺構(図版1・19・20、表1)

遺物・櫛・土塙・溝・井戸がある。調査区の東側は瓦用の粘土採集のため削りとられていた。

建物は5棟が確認できた。SB 031の規模は2間×1間で棟は東西の方向を向く。桁行、梁行は8.1m、3.3mである。桁行は8.1mの長さを2間に間取っているが、長さのうえで不自然であり、柱をもう一本設定して3間に間取られた可能性を考える。SB 032の規模は3間×2間で棟は南北の方向を向く、桁行、梁行は7.5m、5.4mである。SB 031と重複関係をもつ。また、SB 032はSD 004・SK 011・SK 013とも重複関係をもつが、これらの遺構により、柱穴が消滅している。SB 033の規模は2間×2間で棟は東西の方向を向く。桁行、梁行は6.9m、4.2mである。SB 031とほぼ同じ棟方向を向くが、建物自体は重複しており、時期差が認められる。SB 034の規模は2間×1間で棟は南北の方向を向く。桁行、梁行は7.5m、3.6mである。他の建物と比較すると柱間がかなり長い建物といえる。SK 016・SK 015と重複関係をもつ。SB 035の規模は2間×2間で棟は南北の方向を向く。桁行、梁行は5.7m、4.5mである。

櫛は大溝であるSD 001の南側の縁に沿って、ほぼ一列に並ぶ。間尺はSA 038では5.7m、SA 037では5.4m、SA 036では5.7mとなっている。いずれも柱間は3間で一列の櫛が構成されており、間尺の上でもほぼ統一されている。調査区の両端でもSD 001の南側縁に柱穴が並んでおり、さらに西側へのびる櫛列の可能性がある。

発掘区の中央に分布する土壙群は、ほぼ共通した特徴をもつ。面積の上では約10m²の広がりがあって、ほぼ隅円の方形を呈する。深さは20~30cmと浅いもので、土壙内は平坦な面となっている。周縁には柱穴が散在していることから、住居域に伴なう土壙とでも言うべき性格が考えられる。SD 001は幅が約5m、深さが約80cmの大きな溝である。東西の方向にのびており、郭内を区画するための溝と考えられる。溝の南側と北側では約60cmの比高差があり、自然の微地形を最大限に利用して施設を配置していることがうかがえる。なお、溝のほぼ中央部を廻断するように石積みが走っており、規模を縮小して、溝の再利用をはかっていることがわかる。

遺物(図版2・3-1・29・30)

出土した遺物は中世と近世に区分される。中世に属するものは、珠洲、越前、瀬戸・美濃、青磁、白磁、染付、土師質土器である。近世のものとしては越中瀬戸がある。

珠洲(2-42-46、3-1) 瓢、壺、鉢がある。瓢の大部分は体部と口縁部の破片で、全体の形状がわかる個体は少ない。1は口径58cmをはかる瓢である。口縁部外面にはタタキ具の端部によってできた凹面が残されている。肩部には「N」という記号状刻文が刻まれているが、比較的よくみられる刻文とされている[吉岡1977]。42・43・46はいずれも肥厚した口縁部がゆるく外反している。また、ゆるやかなはりだしをもつように体部の成形がなされている。鉢の内面には密にオロシメが施されている。大部分の個体は、内面の摩耗度が激しく、かなり使いこまれた様子がうかがえる。口縁部の破片は、口唇が内傾するものとほぼ水平なものが存在する。前者の口唇には、描绘波状文が施されている。珠洲のこれらの特徴は近年の珠洲編年[吉岡1982]に照らすと、Ⅳ期~Ⅵ期に含まれることになり、実年代でいえば14世紀、15世紀に相当する。

越前、瓢と壺が確認できる。瓢はすべて体部破片である。壺は口縁部の破片(29-3の13)が存在する。口径は約12cmをはかる。外側へ折りまげられた断面三角形の口縁部となっている。近年の越前編年[田中1981]に照らせば、

おおむね13世紀後半から14世紀前半の年代が与えられる。

瀬戸・美濃（2-18・19・31・34-36） 碗、皿、香炉がある。碗（18・34・35）は鉄釉が施釉された天目茶碗である。いずれも口径は約16cmをはかり、口縁部は極めて類似した成形となっている。香炉（31）は口径8cm、高さ2.3cmの小さなものである。外底面には回転糸切り痕が残され、豆粒状の足が3個（2個現存）付けられている。釉は鉄釉であり、口縁部と体部外面のみに施釉されている。皿（19）は口径約11cmをはかる。ゆるく外反し丸みをもった口縁部となっている。高台は削りだしにより作り出されており、低く安定した高台となっている。釉は淡い灰色をおびた灰釉であり、内面と外面の高台付近まで施釉されている。内面には細かな鉢入が入っている。これらは瀬戸編年〔藤沢1981〕に照らすとおおむね14世紀後半から15世紀代に含まれる。

青磁、白磁（2-20-23・25） 青磁（21-23・25）は碗と皿が確認できる。碗の外面には蓮弁を有するものがある（22・23）。23は蓮弁が1枚づつくっきりと削り出されている。22の蓮弁は波状の横方向への沈線と直線的な縱方向への沈線で表現されている。同じ蓮弁でも両者の者にはかなりの時期差が認められる。青磁の大部分は龍泉窯系の青磁と考えられる。21は皿であるが、釉の発色が淡い青灰色となっており、表面の光沢が鈍くなっている点で他の青磁とは異なっており、产地を異なる可能性がある。白磁はすべて皿である（20）。口縁部は端反りとなっている。青磁碗の蓮弁が簡略化されるのは15世紀以降である〔上田1982〕。白磁皿は一乗谷朝倉遺跡などに類例があり、おおむね16世紀の年代を与えることができる〔森田1982〕。

染付（2-38・39） 碗（38）と皿（39）である。碗は断面三角形の小さな高台をもつ。疊付には施釉されていない。見込み部分は釉が輪状に削りとられている。内面に描かれている文様は草花文の一種と考えられ、淡い緑色に発色している。皿の口縁端部はゆるやかな端反りとなっており、高台から口縁部へは直線的に立ち上がっている。高台は鋭い断面三角形に成形されており、疊付の釉は削りとされている。見込みには草花文が描かれている。

土師質小皿（2-1、2・4-17・27-30） 法量差から3群に分類される。A群は口径が14-16cm、高さが2-3cmを測る一群である。口縁部の内外面にはヨコナデが観察され、底部外面にはヘラケズリの後ナデによる調整がなされている。口縁端部はゆるく外反する。B群は口径10-12cmで、高さが2-3cmをはかる（1・8-15・29・30）。数量的には3群の中で最も多く、内外面にヨコナデが観察されるものとされないものが存在する。後者は手づくねによって成形されており、外面には指頭によるオサエやナデの調整がみられる。C群は口径8-9cmで、高さが1-2cmの一群である（2・16・27・28）。27の外底面には回転糸切り痕が残っている。大部分の個体は手づくねによって成形されている。口縁端部に油煙が付着しているものが多く、灯明皿として使用されていたことがわかる。

鉄器（2-47） 小刀がSK 006から1点出土している。刃渡りが20cmで、全面にサビが厚く付着している。

石製品、石臼、石鉢、宝鏡印塔などがSD 001から出土している。石臼は上臼で直径約35cmをはかる。石鉢は厚さが3cm、直径が約35cmをはかる。扁平な口縁をもち内面外面ともに敲打による整形をうけている。宝鏡印塔は塔身部分であるが、敲打により再整形されて、扁平な板状となっている。建物の礎石として転用されたと考える。

中世の遺物は一部に古いものや新しいもののがみられるものの、おおむね14-16世紀に属する。在地陶器である珠洲はⅣ期からⅥ期にかけて連続的に認められる。これとセットをなすと考えられる外來の瀬戸・美濃と輸入陶磁器の間には時期的な関係がおおまかに認められる。つまり、瀬戸・美濃は14世紀後半から15世紀代の年代が与えられるのに対して、中国製の陶磁器の年代は15世紀から16世紀に求めることができる。このような関係が弓庄城跡の他の地点や県内の他遺跡において普遍的に認められるかどうかについては、今後に残された大きな課題である。

近世に属する越中瀬戸には皿（37）、小壺（24）、鉢（29-3の10-12・15）がある。皿には鉄釉と灰釉が施釉されている。内面見込みに菊花文が押される個体も存在する。鉢の内面には密にオロシメが施され、内外面に薄く鉄釉が施釉されている。

（松島）

2. E 地点の調査

イ. E地点 1区

E地点は、本丸南側の部分である。1区は、古絵図に見られる本丸西側の1段低い郭（本丸との比高差約5m）と堀を隔てた南側に位置する郭と対応できる。前年調査を実施したD地点（堀跡）とは約10mの比高差を持つ。また、東側E 3区とは、約5mの比高差を持ち、異なる郭と考えられる。E 1区は、大字館、字菜洗場である。

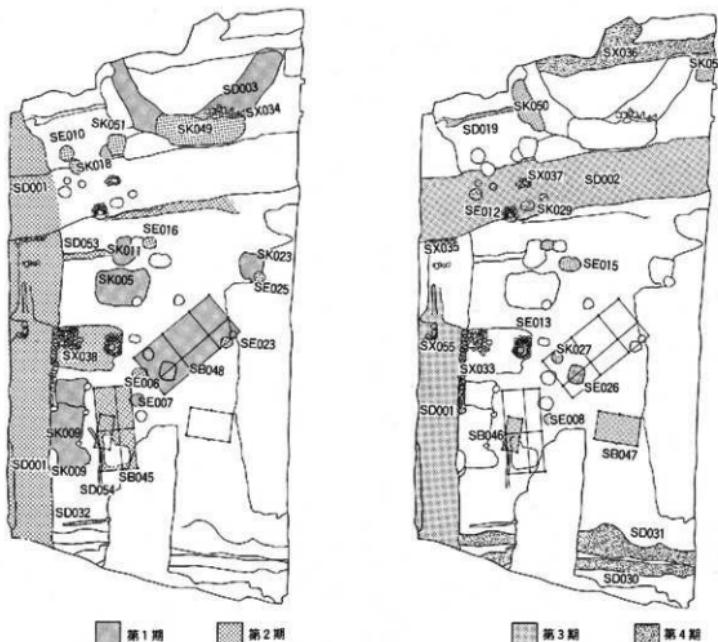
遺構（第3図、図版4・21～23、表1）

溝・土塁・井戸・建物・石垣がある。溝は、郭内を区画する大形（幅2～3m）の溝SD001・002・003と排水用の溝と考えられるSD019・032・043・053・054などがある。

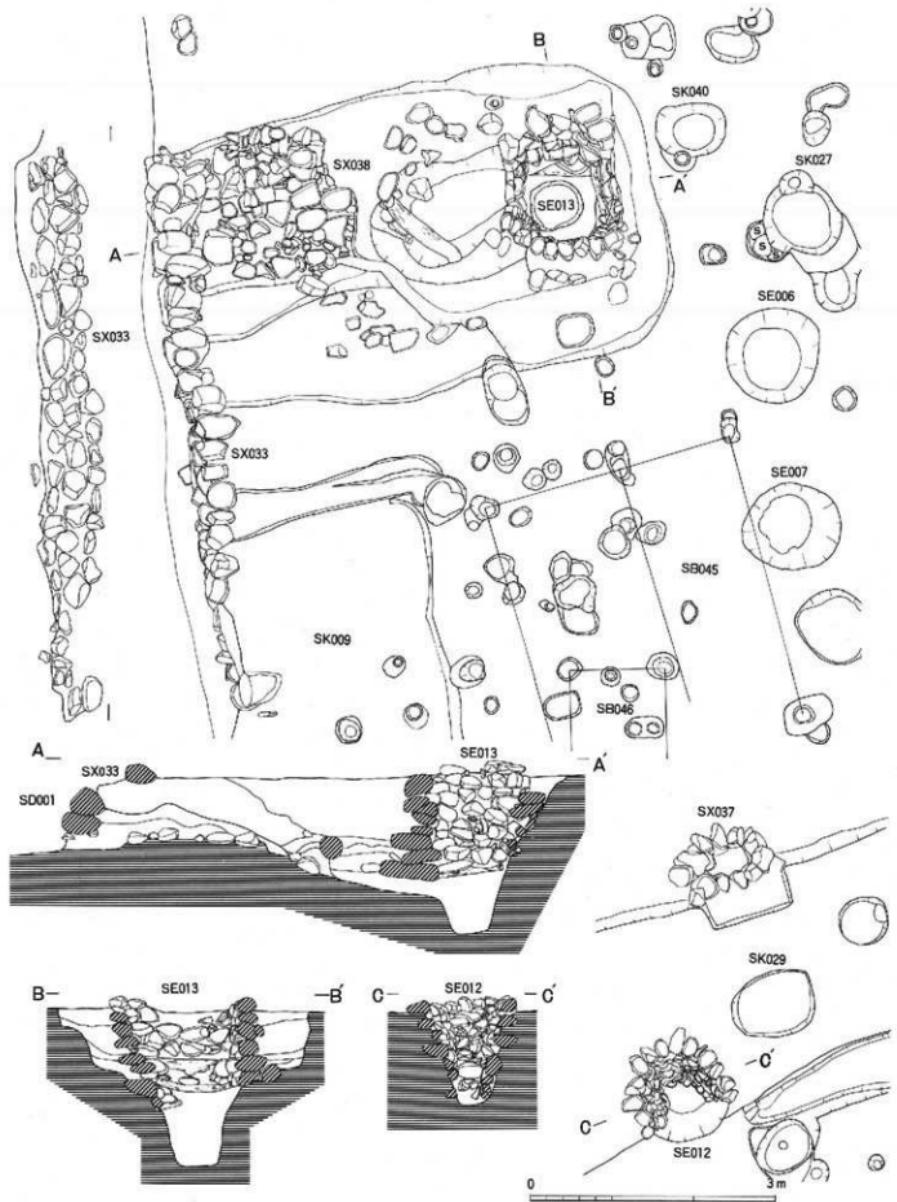
土塁は、方形のもの、不定形のものと円形のものがある。しかし、上層は検出されていない。井戸は、直径約1m深さ1.5～2mの大形のものSE006～008・013・015・016・018と井戸または、土塁と考えられるSE023・025と直径約1m、深さ1mのSK018・027・039～042があり、いづれとも判断しがたい。SE012・013は石組みの井戸である。

建物は、4棟が認められる。柱穴数に比べて建物が少なく、かなりの建物の存在が推測される。

石垣は、溝・土塁などの2次的利用を目的として作られる。石垣は、黒色土内（遺構覆土内）に見られ、土砂の崩れを防ぐ為と考えられる。SX034は、SD003内を掘り窪め、SK049として利用する為の施設と考えられる。また、SD001の北側に積まれるSX035は、南側に対応し並ぶ石と共にSD002に付属する施設である。



第3図 E地点 1区遺構配置図



第4図 E地点1区造構図(3)

井戸 SE 012・SX 037（第4図）は、溝SD 002が埋められた後、新たに掘り込まれた遺構でSD 002覆土内に作られるSE 012は、SD 002と地山との境目に掘られ、溝内の北側部分は人頭大の河原石を積み上げる。

井戸 SE 013（第4図）は、SX 033・038・SD 001と重複関係を持つ。構築順はSD 001に付属すると考えられるSX 038、次にSD 001西側の石垣SX 003が作られ、その後SX 038の上部からSE 013が作られる。その為、SX 038の底面より上部に石積みが見られ、下方より大形の河原石（30×60cm）を置き、下～中段に石積みを支える為の直径（10～20cm）の丸木を3本配して、上部は人頭大の石を積む。

E 1 地区の遺構の変遷について（第3図） 遺構は、重複などの関係からおおむね4期の存在を推測できる。

第1期 溝SD 003とSB 048を中心とする遺構群、第2期、溝SD 001とSB 045を中心とした遺構群、第3期、E 1区が弓庄城の郭として存在した最終的な形で、溝SD 002とSD 001の一部を利用し、SB 046・047を中心とする遺構群、第4期、近世以降に作られた遺構群でSE 012・SK 029・SX 037・SD 030・031などがある。遺物には、第1期以前と考えられる越前・珠洲などが出土しているが、遺構群としては認められない。また、柱穴は、第1～3期に位置すると推測される。

遺物（図版3・5～7・31～33・37・38）

出土品には、国内産の陶磁器・中国製磁器・石製品・金属器・漆器・木製品・炭化米・植物の果皮・種子がある。土師質小皿（5-1-19・21-49） 口縁部の形状により大きく3類に分けられる。1. 口縁端部が丸く小さく立つ（1・2・5・6・8・10-22-39-49） 2. 口縁部にヨコナデが施され、端部が比厚し小さく立つもの（4・7-11-18・20-24-27-29-37） 3. 口縁端部を面取する（28・38）などがある。

珠洲（5-65-67-68, 6-37-39-42, 7-19-21） 撥鉢は、口縁部内面にクシ描き波状文、内面に6～8条のオロシメを施す。口縁部は長く伸びたものが多く、吉岡氏による珠洲編年〔吉岡1982〕の後半～末期に編年できるものが多い。甕（5-67-68）は、口縁部が玉縁とならず、「く」字状に折れ曲がる。壺（6-37）は、口縁が立ち、外反するものでタキが丹念に施される。甕・壺は、共に口縁部の特徴から珠洲のⅢ～Ⅳ期に位置付けられる。

瀬戸・美濃系陶器（5-20-60, 6-5-11-14-21-26-27） 皿・茶碗・四耳壺・水滴がある。

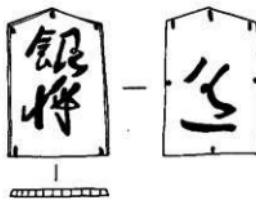
皿は、大きく外開する（6-5）ものと口縁が小さく外反する（6-6-11）ものがあり、後者は、高台の違いにより2種に分類される。高台端部が三角形となり灰釉が施される（7-10）と平坦な高台を持つ（6-11, 5-20）がある。6-20は、灰釉おろし皿。茶碗（6-14-19-21-27）は、天目と平碗がある。天目は、口縁が外開きとなる14・15・17・21と口縁の窄まる16がある。21は小形の天目で2次的に火熱を受けている。平碗は、折縁の18と蓮弁文を施す19・27がある。四耳壺（5-66）は、灰釉が厚く施され、3条の弦線が2箇所に巡る、耳は、クシ状工具により肩部に押しつけられる。水滴（26）は、蓋部に花文を配し、灰釉が施され、底部に糸切痕を残す。

越中瀬戸（6-1-4・12-28・30-31-33-36） 皿・急須・壺鉢などがある。皿（1-4・12-28）は、ゆるく外開きとなる1～4と、口縁部の立つ2がある。いづれも灰釉を施す。

28は、小形皿で底に糸切痕を持つ。33・34・36は、素焼きの焼物で円柱形でサヤ状の34・36と碗状の33がある。急須（35）は、鉄軸を施す。

壺鉢（30・31）は、鉄軸（茶色）を施すものでオロシメの細かい30と荒い31がある。

越前は、壺鉢（5-64）・壺（7-8）・甕（7-17-22）がある。大甕（17）は、緩く外反する口縁で、内面に条線、外面に隆帯を持つ。胴部には、「本」と押印される。22は、E 1区の北西側の溝（SD 001・SD 003）や土塙（SK 005）などに広く散在し出土している。



第5図 SE 015出土遺物（3）

国内産の陶磁器（6-13・23-25・32）は、染付（23・24）・小皿（13・25）や鉄軸の擂鉢（32）がある。

青磁（5-56・57・59・63、6-22）56・59は大盤で、59は蓮弁文が施される。57・63・22は、碗・盤で共に青緑色の釉調で龍泉窯系のものである。白磁（5-58・60・62）は、いづれも高台付き皿で、薄作りである。染付（5-49-55・31・15-19・23・25・27）は、草花文様や雲形文様等が描かれる碗で明代と考えられる。

石製品（3-3・4・8・15・17・19、6-29、7-23）石製品には、五輪塔（8・15・17）・挽臼（3・4）・擂臼（19）・砥石（23）・硯（29）がある。

五輪塔は、すべて2次的に移動されており、井戸内、遺物包含層などから出土している。部位は、相輪・火輪・水輪各1個が出土している。火輪は、棟勾配は曲線的である。水輪17は、2次的に加工が施され上部から荒く臼状に埋められた石鉢の未製品状である。そのため梵字は、一部が読み取れ、「パン」と考えられる。石質は花崗岩である。

挽臼は、SD 003から一对出土している。良く使用されており挽目がほとんど滑り減っている。臼は浅い鉢状に作られている。砥石は、四角柱で4面を使用している。硯（19）は、SD 002の西側の覆土内から鍔・鞘金具（7-11・16）と共に甲冑（6-16）に鉄錆により付着し出土した。硯は薄作りで、海は浅く、裏面は溝を切る。陸部は良く使用され、幾分痛み墨痕が表裏面に残る。石質は、緑色の粘板岩質である。

金属製品（7-9・10・13-16、33-2・8・11-16）鉄製品と銅製品がある。鉄製品は、釘（15）・刀子状の14・曲がった釘状の13や用途不明の（33-11・13）がある。銅製品は、「寛永通宝」（33-14）や鉄に銅板を張り付けた小柄の柄部、鞘頭と考えられる11と鉄製で甲冑と錆により付着している鏡がある。

甲冑（16）は、鉄板に黒漆を厚く施すもので漆のみが残る。また、小札の断片と考えられる朱描で描画した漆の板が数点出土している。

漆器（7-8、30-18）はいづれも碗で、SK 018・022・SE 013・015、SK 024から出土している。原形を止めるものはSE 015出土の7-8のみである。内面には鶴が朱描されている。

木製品（7-1-8・10・12、30-14-17、38-4-12）井戸内からの出土が大半を占める。中でも SE 015の井戸底からの出土が多い。櫛（3）・ヘラ（10）・墨痕のある（2）・曲物の底板（30-14）・箸（5-7）や加工痕を持つ4や板・削りくずなどが多量に出土した。中でも将棋の駒（第4図）は、長さ28mm、幅18-19.5mm、厚さ2mmの薄板製で、表面に「銀将」、裏面に「金」と墨書きされる。また、裏面はそれぞれ銀・金の進行方向を示す印が墨で付けられる。12は、SE 007出土の漆を施した曲物底板、1は、一方にえぐりを入れ、他の方を断面三角形に削り尖らせる。また背面を深く削り込む木製品で、鳥または馬形の木製品と考えられる。

炭化米は、SD 001-003などのE 1区の北西側部分から大量に検出されている。その他に、井戸内からは、植物遺体が多数検出される。SE 013からは、ヒヨウタンの果皮と種子・ウリの種、SE 015からは、ウメの核・クリ・クルミの果皮や植物の葉、海産の魚（スズキ目）の骨などが検出されている。

E 1区は、出土遺物から見ると鎌倉後半～南北朝期の遺物、遺構が若干見られるが、中心になる時代は、室町時代と考えられ、近世に至って、再び利用されたと考えられる。

口、E地点2区（図版10）

2区は、E 1区の南側、E 3区の西側に位置する地区である。遺構等は、瓦用の粘土採掘により地山下1-1.5m掘り込まれ、既に消滅し、若干の遺物が出土したのみである。

遺物（10-4・5）青磁と鉄軸を施した瀬戸・美濃系の陶器がある。

4は、周縁が模花様となり、口縁内面に2-3条の沈線を廻らし、ヘラ描きの花文を施す青磁で釉は厚く、青緑色を呈し、全面に貫入が見られる。5は、外面に蓮弁風の文様を彫り込み鉄軸を施す。釉調は黒茶を呈し、内面には見られない。香炉と考えられる。

（酒井）

ハ. E地点3区

3区は、本丸の南側標高55mの地区で、段丘上では2段目の平坦地に位置する。発掘区西側と南側では瓦製作用の粘土採掘で一部遺構が失われているが、他の部分では良好な残存状況である。地山（遺構検出面）は黄色の粘質土で、調査区全体にみられる。

遺構（第6図、表1、図版11・24・25・26）

検出した遺構は、掘立柱建物（以下、建物とする）11棟・櫛列1箇所・井戸6基・溝6箇所・土塙多数である。遺構は溝により3つの地域に区画される。このうち東側と西側の区画には建物が集中し、中央の区画には、土塙や集石遺構が検出された。

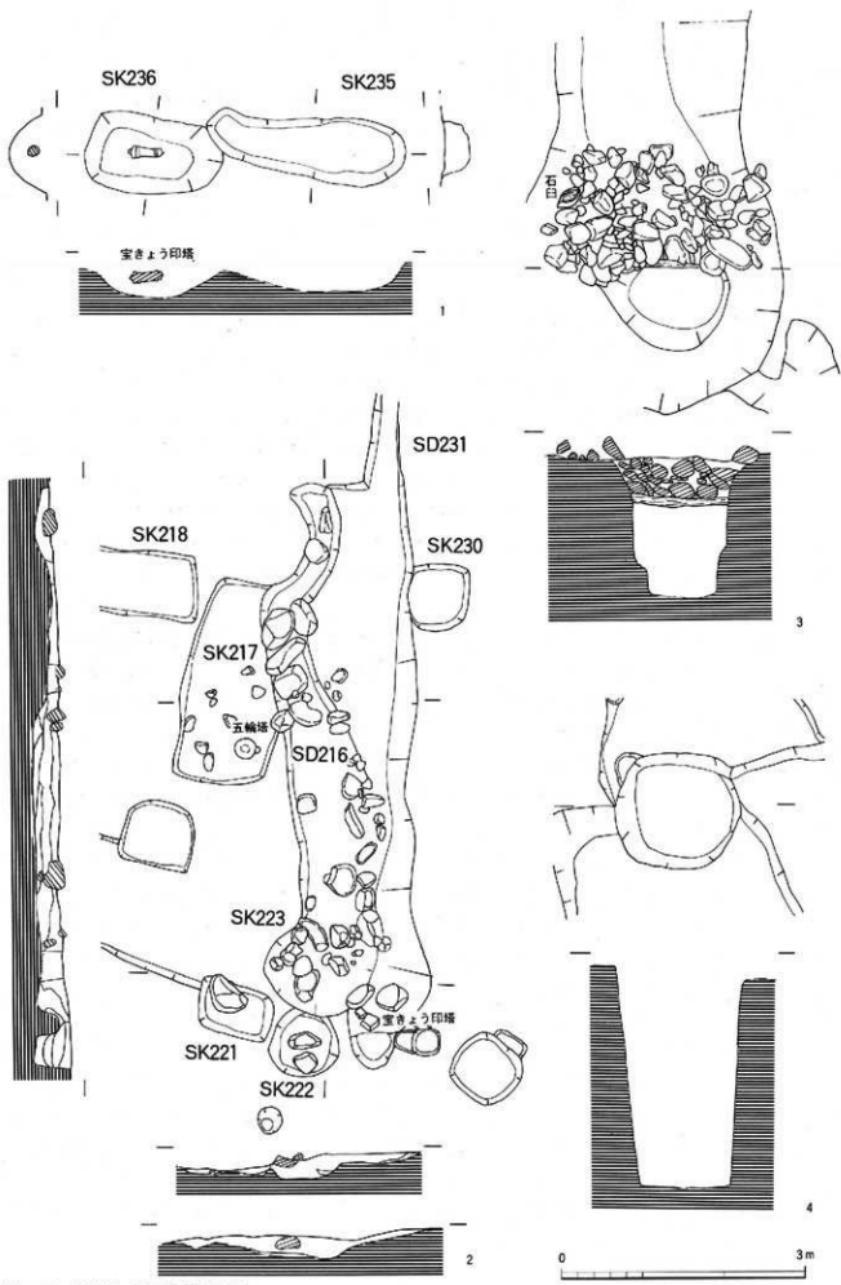
建物 建物11棟のうち東側の建物SB 289・290・291・293の4棟と、東側の建物SB 295・296・297・298・299・300の6棟はそれぞれ重複関係をもつ。SB 289・290・291はそれぞれ2間(8.4m)×2間(7.2m)、2間(7.2m)×2間(6.9m)、2間(9.6m)×1間(5.1m)の規模で、方向はいずれもN-11°-Eを測る。柱穴は直径約1m、深さ約60cmの大きなもので堅固な建物を想起させる。SB 290には溝SD 260が、SB 291には櫛SA 292がそれぞれ付随している。SB 289・290・291はその切り合い関係からみてSB 291→SB 289→SB 290の順で建て替えられたものと考えられる。建物SB 293は他の3棟と間尺や方向が異なっており時期的な差があるものであろう。SB 296・297、SB 299・300はそれぞれ新旧関係をもっており、SB 297→SB 296、SB 300→SB 299の順に建て替えられたものと考えられる。他の建物については新旧関係が不明であるが、2回から3回の建て替えがあったものと推測される。建物SB 295・296・299・300は棟が東側へのびる可能性がある。東側の建物と西側の建物に時期的な差があるかどうかは判断できない。

溝 溝は郭を区画するものとして、SD 201・202・211と近世の溝SD 276がある。溝SD 201は郭を南北と東西に区画するため「L」字状に掘られている。北東側で、幅約2m、深さ約45cm、南西側で、幅約4m、深さ約60cmを測り、西流する。溝SD 211は、中央部を区画するために掘られた溝で、東側と南側でそれぞれSD 201に連なっている。東側で幅約3m、深さ約20cm、南側で幅約4m、深さ約50cmを測り、南流する。SD 202は北側で幅約1.5m、深さ約30cm、南側で幅約2m、深さ約20cmで北流する。溝SD 211・201は同時期に存在したものと考えられるが、溝SD 202は切り合い関係から古い時期のものと考えられる。溝SD 276は幅約1m、深さ約20cmで東流する。なおこの溝は1区のSD 030に連なっている。

土塙 土塙は、中央の区画に集中する。この区画には建物の柱穴がない。土塙から出土する遺物には土師質小皿・宝篋印塔の相輪や塔身、五輪塔の水輪、重なった宋錢が6枚、火を受けたと思われる人骨（金子浩昌氏の御教示による）などが検出されている。土塙は円形や隅円の方形のものが多く径が約1m、深さ約20cmのものが多いが、SK 235（長軸約2.8m、幅約1.0m、深さ約40cm）やSK 236（長軸2.0m、幅約1.5m、深さ約40cm）のような長円形のもののが見られる。またSK 223は直径約1m、深さ約20cmで、石がつめられている。以上からこの中央の区画には墓域があったものと考えられる。

井戸 井戸は全部で6箇所検出された。規模はSE 287が直径約1.1m、深さ約1.8m、SE 226直径約1.6m、深さ約2.5m、SE 215直径約1.0m、深さ約1.0m、SE 228直径約1.0m、深さ約1.5m、SE 271直径約1.5m、深さ約2.0m、SE 228直径約1.4m、深さ約1.2mと規模は一定ではない。しかしながらいずれも湧水層に達するまで掘り下げられており、相対的にみて、深い井戸ほど、直径が大きくなる傾向があるようである。SE 215・SE 228は、北側に石組みが施されているが、溝や、土塙を切って掘られているため、軟弱な部分に補強をしたものであろう。井戸SE 226、SE 228は建物SB 289・290・291に付隨すると考えられるが、他のものについてはどの遺構と関連があるのか不明である。

（高慶）



第6図 E地点3区遺構図(%)

1・2 土塙 3 SE 215 4 SE 226

遺物 (図版 8 ~10・30・33~38)

遺物には土師質土器、珠洲、青磁、白磁、染付、越前、瀬戸・美濃系陶器、越中瀬戸、金属製品、木製品、石製品がある。遺物は中世から近世前半のものがあり、特に14~16世紀のものが多い。

土師質土器 (8-1~34, 10-27) 盆には外底面に糸切りのあるもの (7・19) とないものがある。前者の7は外反する口縁部に開く端部が付く。19は口縁端部外面を面取りする。後者のものは、口縁部の形態により、外反するもの (1~5・10~13・20~24)、「く」の字状に外反するもの (6・17) 外反する口縁の端部を内側につまみ上げるもの (8・9・14~16・27~29・31・32)、外反する口縁の端部が開くもの (25~26・33)、口縁端部を強くナデて、直立するもの (34) に分れる。その他、10~27は火鉢である。

珠洲 (8-35~46, 9-27~28・37~41) 器種には甕 (35~46), 鉢 (27~28・38~41), 壺 (37) がある。甕は直立する口縁の端部がくちばし状に折れ曲がり、内面に沈線を彫らすもの (39~44), 口縁部が「く」の字状に折れ曲がるもの (35~38・41), 口縁部が玉縁状になるもの (45), 口縁端部を面取りするもの (40~42) に分れる。43にはヘラ記号がある。鉢には描鉢とこね鉢がある。前者の40は内面に竹管の押印があり、27・28は口縁端部を三角形に尖らし、クシ描き波状文を施す。吉岡氏の珠洲編年 [吉岡1982] に従えば、44は12世紀後半、8-39は13世紀前半、37・38・40・41・45、9-39は14世紀、36・42・46、9-27~28・38は15~16世紀となる。

青磁 (10-9・11) 9は内底面にヘラで文様が描かれている碗である。11は緑色の釉がかかる碗である。図版35-1の22は口縁部内面にヘラで沈線を引いた稜花皿である。

白磁 (9-30, 10-1~3・10-12・14) 1は切り高台の皿で、口縁端部は面取りしている。高台外面付近に露胎の部分がある以外は、乳白色の釉がかかり、器面全体に細かい質入が走る。内底面には重ね焼きの目跡がある。12・30は口縁端部が開く皿である。釉は灰白色で、質付は露胎で、高台内面の釉は搔き取られている。10は唐草文の印を外面に押した皿である。全面施釉で、質付と平坦な口縁端部は釉が薄くかかっている。口縁端部を平坦にしている点から、合子の身にあたるのだろうか。14は口縁部を菊花に形どった皿で、白色の釉がかかる。森田氏の白磁編年 [森田1982] に従えば、1は15世紀前半、12・30は15世紀後半~16世紀になろう。

染付 (10-13・16~22) 20・21は唐草文を外面に施した碗である。18は見込みの釉を輪状に搔き取り、基筒底にした皿である。高台外面と内底面は無釉である。19は口縁外面に鶴の文様のある碗で、外底面に「L」の字がある。18・19は伊万里、20・21は明代のものか。

越前 (9-42・43, 10-7) 器種には甕 (7), 描鉢 (42・43), 壺 (36-1の1) がある。7は口縁部が立ち上がり、内面に沈線がある。42・43のオロシメは9本単位で上から下に引かれている。1は口縁端部が丸く外に巻き込む壺の口縁部である。越前編年 [出田1982] に従えば、1は13世紀後半、7・42・43は16世紀後半となろう。

瀬戸・美濃系陶器 (9-1・2・14・18・19・23・25・32~34・36) 器種には皿 (1・2・18・29), 碗 (15・16・23・32), 茶入れ (33・36), 水滴 (34) がある。2・29は外面に灰釉がかかる。18の外底面には輪トチンが付着している。15・16・23は天目茶碗で、15の断面には漆が付着している。32は灰釉の碗で、外面に縦の線刻が施されている。1は乳白色の釉がかかり、基筒底にしている皿である。見込みは無釉である。36は糸切り底である。

越中瀬戸 (9-3・12・17・24・25・35・44~47, 10-6・15・24・25) 器種には皿 (3~12), 碗 (17~24・25), 描鉢 (44~47), 壺 (6・24), 建水 (25), きや (20) がある。皿には乳白色と黄緑色の釉がかかる。底部内外面は無釉である。内底面に印花文がある (5~7・10~12)。口縁部が外反するものと外反して端部が立ち上がるものがある。17はやや白っぽい鉄釉が施されている天目茶碗である。6は口縁端部が平坦で、外面に縦のある壺で、褐色の釉がかかる。15は褐色の釉がかかる碗で、外底面に糸切り痕を留める。24は素焼きの壺で藏骨器と考えられる。25はクシ描き波状文を施す。その他、10-8は壺の胸部破片で、内外面は赤褐色で備前の壺であろうか。

金属製品 (10-28・30) 鉄製品には幅6mm、厚さ1mmの板状の釘(28)、長さ35cm、断面が正方形(一辺6mm)で一方の端に穴のある火箸(30)がある。土塙SK234から6枚重ねの北宋銭(34-27)が出土している。熙寧元宝・元祐通宝2枚・至道通宝・文字不明・祥符通宝の6枚である。30-12は刀の小柄の一部である。

木製品 (10-29) 29は長さ63.5cm、幅42cm、深さ12cmの刺りものである。井戸SE287の底より出土している。芯持材を半截して、内面を刺り貫いたものである。樹齢55年以上的年輪をもつ松の木が使用されている。

石製品 (3-2・5-7・10-14-18) 石塔には宝鏡印塔の部位(5-7・9-13)と五輪塔の部位(16)がある。時代は室町時代である(京田良忠氏ご教示)。5-7は相輪であり、2つのタイプがある。7は九輪以下欠損しているが、九輪を省略した5と同じタイプである。6は省略した九輪の上に水槽を設けているタイプである。9-10は笠で、軒下2段軒上4段である。隅脚突起は少し欠損しているが、共に開き気味である。最下段は9で16cm×17cm10で17.5cm四方の大きさである。11-12は塔身で、15cm×16cm×17cmの大きさである。正面に「パン」の梵字を彫り刻んでいる。13は基礎で、21.5cm×24.5cm×24.5cmの大きさである。側面三区には格子間を、上端の四方には面取りして略した単弁反花を彫り刻んである。16は水輪で、正面に「パン」の梵字が彫り刻まれている。石質は5・6・11-13・16は花崗岩質、7は凝灰岩質である。なお、9・12は近世の溝SD276の土留め用に使われている。その他、2は側面に3つ、背面に4つの穴が率たれ、正面下部には2条の深い溝を残す。その形状から仏像に見える。石質は凝灰岩質である。14は茶臼の上臼で、下面にふくみを持たせるために彫み、孔の縁には菱形の文様がある。18は茶臼の下臼で受け皿が付いている。目はすりへっていて見えない。石質は共に砂岩質である。

(宮田)

3. F地点の調査

イ. F地点

F地点は昭和56年度に試掘調査が行われ、堀が確認されていた。その堀は古絵図に言う本丸を取り囲む東側の外堀(竜ヶ池)と考えられた。しかし、今回の調査から、その外堀は調査区よりも少し西側に寄っていると推測される。この地点は南で標高60m、北で標高55mの南北に細長い高まりでX60区付近で1.4mの高低差を持つ段がある。その段を境にして北側の地山は黄褐色砂質土、南側のそれは赤褐色粘質土である。北側はやや湿地の感を呈している。

遺構(図版12・27・28、表1)

遺構には掘立柱建物3・溝9・井戸2・土塙等がある。建物は2つの群に分かれて位置し、建替えが少ない。建物は鎌倉時代のものと江戸時代以降のものである。柱穴の数も他の地点に比べて少ない。

建物SB504は南北に長い2間×2間の建物である。柱穴の掘り形は直径20~30cm、深さは地山を僅かに掘り進めた程度である。この柱穴から漆器が出土している。この建物に井戸SE506と溝SD503が伴うと考えられる。SD503は幅50~60cm、深さ15~20cmで、北側で浅くなっている。北方にあるSD503とつながる可能性がある。SE506は直径90cm深さ180cmの素掘りの井戸である。地山上面から140cmの深さの所に段があり、井戸底を掘るために足場としたのであろうか。この井戸底から円形の石製井桁が出土している。

建物SB523・524は4間×2・3間の総柱建物で、西側の水田部分(未掘)に桁・梁がのびると考えられる。両者の建物の柱穴から柱根を埋める時に入れたと考えられる礎板が出土している。SB524は北側に舟を持ち、溝SD511と直角になる棟を持つ。SD511は鎌倉時代の溝で、幅70~110cm、深さ25~45cmである。溝の西側の部分は幅が狭く深さが深い。南側の部分は広く浅く、土師質小皿が多数出土している。SB524と溝SD512とは切り合い関係があり後者の方が古い。SD512は幅70~110cm、深さ15cmで北流する。SB523の棟の雨落ち溝と考えられる。SB523・524とSD511との間に柱穴等の遺構は確認できない。また上記の2つの建物群の間には溝SD501がある。その溝は東側で浅くなり、西側で幅3m、深さ1mで、北流する。溝底より珠洲の壺と越中漸口の皿の破片が出土している。SB523・524と南側の溝SD510との間には井戸517や柱根を残す柱穴があり、その調査区外の東・西には建物が存在する

ことが予測される。SE 517は直径25cm、深さ140cmの素掘りの井戸である。

溝SD 510は幅3.5~5.5m、深さ1.0~1.2mの北流する溝である。すくなくとも2回の流路が確認できた。溝の最下層から古式土器や須恵器の破片が僅かに出土している。SD 510は南でSD 510A、SD 510B、SD 510Cの3つの溝に分かれるが、それぞれの溝の切り合ひ関係が見られない。SD 510BはE地点に延びて行くことが確認されている。その他、SX 521はE地点へ落ち込んで行く谷の底である。

遺物 (図版13・14・38~40)

遺物には上師質土器、珠洲、青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃系陶器、越中瀬戸、越前、漆器、木製品、金属製品がある。遺物は建物周辺や溝内から出土しているが、16世紀のものは少ない。X70以北から木製品が多く出土した。

須恵器 (13~39・41) 39・41は同一個体で、口径52cm、底径18cmの甕である。胴上半の外面にカキメとタタキを施し、内面と内底面に円形あて具痕がある。

土師質小皿 (13~1~23) 外底面に糸切りを残すもの (8・22・23) とそうでないものがある。前者の8は外底面に「歩」の墨書きがあり、23は糸切り後ナデを施している。後者には、口縁部が「く」の字状に折れ曲がるもの (1~7・9~11・19・20)、外反するもの (12~17・21)、外反した口縁端部を面取りするもの (18) がある。

珠洲 (13~24~26・30~40) 器種には甕 (35~38)、鉢 (24~26・31~34・40)、壺 (30) がある。甕には口縁部が立上がり、端部がくちばし状に折れ曲がるもの (38)、「く」の字状に折れ曲がるもの (35)、玉縁状になるもの (37)、口縁端部を面取りするもの (36) がある。鉢はこね鉢 (33・34) と擂鉢 (24~26・31~32~40) がある。前者の33・34は口縁端部を外削りにする。33はヘラ描き文様がある。後者には口縁端部を内削りにしきし描き波状文を施すものがある。時期は吉岡氏の珠洲編年 [吉岡1982] に従えば、38は12世紀後半、24~25・32~34は13世紀前半、36・37・40は13世紀後半~14世紀後半、26~31は15世紀前半となる。

青磁 (13~29、14~16~19~20~22~25~30~33) 器種は碗と皿 (20~29) と香炉 (16) がある。19は濃い緑色の釉で20・25は青緑色の釉である。22は口縁部外面に雷文帶をもつ碗である。25はヘラ先による細線蓮弁文碗である。26・27は龍泉窯系の碗である。29は断面に漆が付着している。33は疊付と高台内面以外に施釉し、内底面には花文をヘラ刻みしている。上田氏の青磁編年 [上田1982] に従えば、22は14世紀後半~15世紀前半、25は15世紀後半~16世紀、33は14世紀以降となる。

白磁 (14~21・28) 21は口はげの皿で、口縁部外面にヘラ描き文様がある。28は口縁端部が少し玉縁状になる碗。

染付 (14~17~18~24~34) 24は疊付の釉を搔き取る高台で、明代のものであろう。その他は伊万里である。

瀬戸・美濃系陶器 (14~8~13~15~37) 器種は碗 (13)、皿 (8~14~15)、茶入れ (37) がある。皿には内外面に灰釉を施す。14の疊付は釉を搔き取り、外底面には重ね焼きの跡がある。37は内面に鉄釉を施す茶入れの底部で、糸切り痕を留める。

越中瀬戸 (13~27~28、14~1~5~11~12~32~33) 器種には皿 (5~27~28)、碗 (11~32~33)、甕 (9)、壺 (39~2の6~9~12)、擂鉢 (39~2の1~2~5~7~8~10~11) がある。皿は口径9.8~13cmの削り出し高台を持つ。内底面に印花がなく「1縁部も外反する。1縁内面に灰釉と鉄釉を施す。碗は口縁部がくびれるものとそうでないものがあり、胴部は丸い。擂鉢は口縁端部外面に三角形の棱を持つ。

金属製品 (14~39~40) 青銅製の煙管40、かんざし39がある。39は丸に花菱の文様が施されて、漆を全体に塗っている。図版40~4は火薬筒の鉛弾である。湯口を残し、中空になった球形が変形している。直径約1cm、重さ5.6g。

漆器 (14~41) 41は内外全面に黒色の漆が塗られ、外底面に「二」の数字を朱書きしている。

木製品 (14~42~51) 曲物の底板46やしゃもじ48~49などの食膳具がある。その他、用途不明のもので、四角の棒状に一方から抉りを入れた42~43~45~50、柄穴のある44、丸く面取りした棒51がある。

(宮田)

4. 中山王窯跡群

イ. 調査までの経過

昭和57年度県営は場整備事業の掘削工事の際、上市町柿沢、館両地内に南北に連なる山地の山麓部（字名中山王）において多数の炭焼窯跡が発見された。また付近一帯で須恵器片も多數発見されたため、上市町教育委員会では急速周辺一帯の分布調査及び試掘調査を実施した。その結果、弓庄城の東側約300mに連なる山地の縁辺部一帯に多数の窯跡が分布することが明らかになった。この調査結果をもとに、上市町教育委員会、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）、県農地林務部（は場整備課・富山農地林務事務所）、地元土地改良区の4者により協議を行ない、一部工法変更により現状保存することとなった。しかし、昭和58年度に行なわれた山地をめぐる用水（五ヶ用水）の改修工事においては遺跡が削平を受ける可能性があったため、立ち合い調査を実施した。

本報告では、昭和57年度の分布調査及び試掘調査、昭和58年度の立ち合い調査の成果をまとめて掲載した。

ロ. 地形（第1図・第6図）

本遺跡群は、弓庄城跡の東側約300mに位置する。地形は、城跡東側に南北に伸びる山地の山麓部、標高67mから80mに立地する。城跡のある白岩川右岸の段丘との比高差は約30mで比較的急な斜面上に立地している。須恵器窯跡は標高70mから85m、炭焼窯は標高67mから70mで炭焼窯が築かれている地区は多少緩斜面に立地している。遺跡の現況は、水田・畑地・雜木林である。遺跡群は、昭和57年度調査と昭和58年度調査の成果をもとにA・B・C・Dの各地区に区分した。以下各地区ごとに述べていきたい。

ハ. A地区

立地、A地区は、立ち合い調査を行なった部分の最南端に位置する。この地区ではこれまでに2箇所の灰層を確認し、南側から第1灰層、第2灰層と仮称した。第1灰層、第2灰層はほぼ同規模で、用水の断面で幅約1.5m、厚さ約50cmを測る。灰層はいずれも黒褐色土で多数の須恵器が検出された。

遺物（図版15・16・41・42・43） 数mへてて2箇所の灰層が認められるが遺物は混在する。

第1灰層出土遺物（図版15） 杯蓋・杯身・高杯・壺・甕・横瓶・焼台などがある。

杯蓋（1～7） 口縁端部がやや開く1・2・5～7と小さく立つ3・4がある。いづれもヘラケズリが施され、外外面をナデる。1は、天井部外表面が未調整でヘラ切り痕を残す。

杯身（8～13・22～24） 立ち上がりは、低く内傾する。受部は、やや上向きに外方に小さく伸びる8～13と厚手で雜な作りの22～24がある。焼台（14・15） 外面にヘラケズリを施す未調整な作りで天井部に2～4箇所有孔される。

高杯（19～21） 19・20は、脚部で2段すかしをもつ。21は、杯部と考えられ、外面にクシ描波状文・キザミを施す。口縁の一部は弧状に削り込みが施され、脚部は剥落する。17・18・28は、壺・甕・横瓶などの口縁部と考えられる。16は横瓶の環状把手。26は用途不明の土製品。25は広口壺。

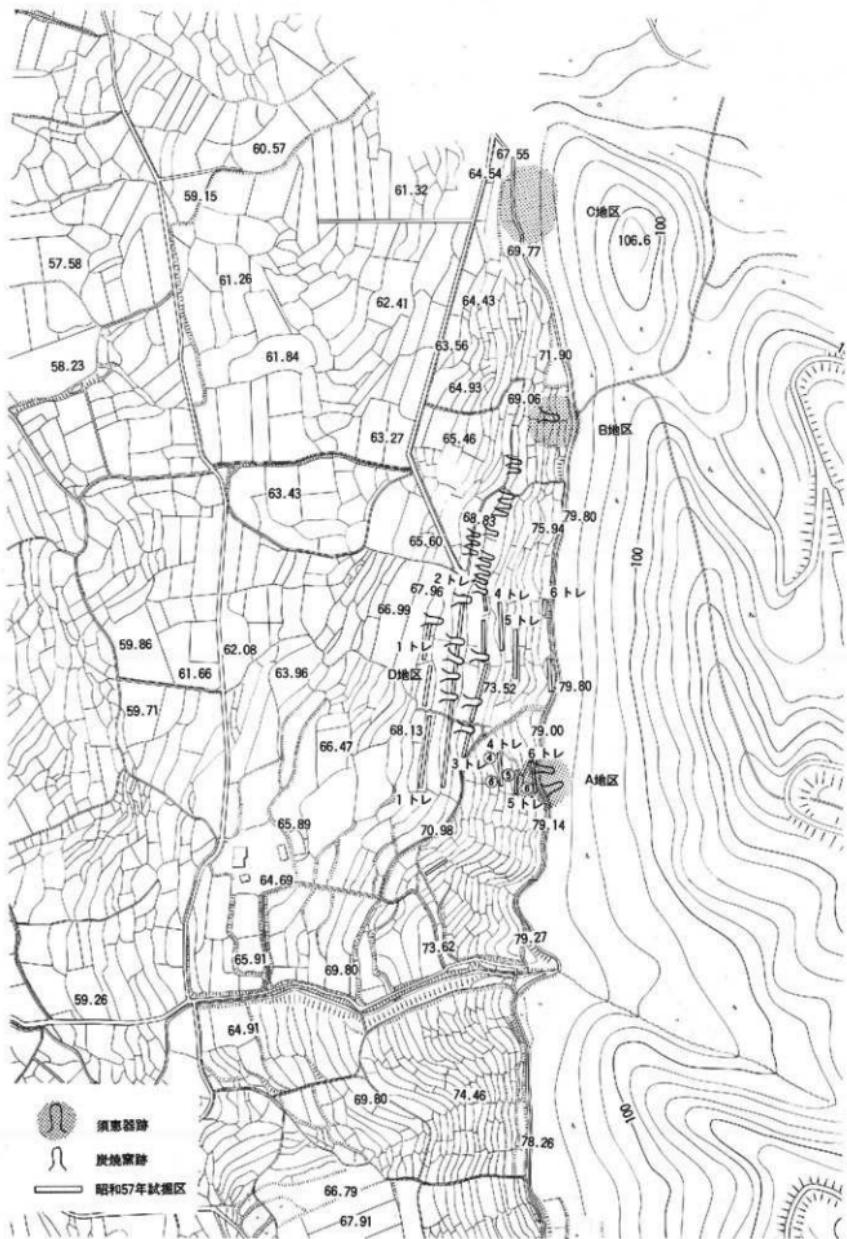
甕（27・29～36） 口縁部のちがいにより3種みられる。口縁が比厚し外反する30～33、小さく内曲する29、口縁外面に断面三角形の隆帯をもつ35・36（同一個体）がある。いづれもクシ描波状文・キザミ・条線を施す。

第2灰層出土遺物（図版16 1～37・40～43） 杯蓋・杯身・高杯・壺・甕・甕がある。

杯蓋（1～16・26・29） 小型で小さく高い宝珠つまみをもつ1～8・11～16とやや大型の9・10がある。器高は、高い4・6・8～12と平坦な1～3・13～16とがみられ、いづれも口縁端部内面に小さなかえりをもつ。29は、外面にヘラ記号を施す。

杯身（17・18・26・27・32～34） 小型で底部から外反し立ち口縁部が薄作りの17・18と厚手の26・27と、厚身で底部から外反し口縁部が小さく立つ32～34がみられる。26・27・32～34は、底面が未調整でヘラ切り痕を残す。

高杯（22～25） 杯部は、脚部にくびれをもつ22ともたない23がある。脚24・25はラッパ状に広がる。



第7図 中山王窑跡群遺構配置図(1/2000)

雄（21・28） 口縁部が2点出土している。ゆるく外反し沈線をもつ21と口縁端部が小さく立つ28がある。

19は、横瓶の口縁、20は壺。外面にみられるタタキ（40～44）は、細かい平行タタキ、内面はやや荒く同心円のタタキを施す40・41と細かく施す41・43がみられる。

31・38は、灰層からややはなれて出土した杯蓋で、大形の宝珠つまみの付く31と、天井外面に糸切り痕をもつ38がある。

二、B地区

立地 B地区は、A地区とC地区のほぼ中間に位置し、両地点とは約150mをへだてる。この地区では窯跡の存在を確認したが、すでに損壊を受けており規模は不明である。しかし、分布調査により採集した須恵器に共作して瓦を検出しておらず、瓦陶兼業の窯跡であることが推測される。

遺物（図版16 1～11・14～18・20・22・23・27・28、図版41 3、図版42 9・10） 杯蓋・杯身・壺・甕・瓦がある。また、図示していないが甕の胴部片が多数と横瓶の破片が表採されている。

杯蓋（1～11） 口縁10～12cmの2～5、口径14～16cmの6～8、口径18～19cmの9～11がある。口縁端部は、小さく鋭く尖り立つ2・3・6～8・11とやや外反する5～10、やや厚く立つ4・9がある。宝珠つまみは扁平である。

杯身（14～18） 無高台で底面から体部へゆるく外反し立ち上がる。底面は、ヘラケズリ、内外面はナデを施す。

壺は、広口壺22と高台部の12がみられる。甕は、外反する口縁部にクシ描き波状文を施す20・23がある。

瓦は（27・28） 両者とも丸瓦で焼成不良である。凹面は、布目がみられ1cmあたりの経緯本数は27が10×12、28が10×13である。凸面は、ナデ調整が施される。28は、断面に粘土接合痕を残す。

三、C地区

立地 C地区は、B地区的北側約150mの地区である。今のところ窯跡は確認されていないが、標高70m付近のテラス状の平坦地に広く遺物が散布しており、2～3基の窯跡の存在が予測される。現在この地区は雑木林であるが、明治、大正の頃は水田耕作が行なわれておらず、窯跡も擾乱を受けたものと思われる。

遺物（図版16、13・19・21・24～26、図版41 1～5） 杯蓋・杯身・甕がある。

杯蓋（41～5） 内面に小さなかえりをもつもので焼台として利用され、甕胴部片に付着している。

杯身 口縁が丸みをもって外反し、立つもので全体に厚作り。12はヘラケズリで未調整な底部をもつ。

甕（19・24～26） 口縁端部に丸みをもち外反する甕で、外面に1～2条の沈線とクシ描き波状文を交互に施す。

四、D地区

立地 D地区はA・B両地区の西側に位置する。これまで確認されている窯跡はいづれも炭焼窯跡で23基を数える。窯はほぼ同規模で、全長約8m、幅約1.3m、断面形が「凹」形となる半地下式のものである。窯内には炭化物の他、窯壁片も含まれており、天井部が崩壊したものと判断できる。この他、D地区では古式土師器が出土しており、古墳時代の遺構の存在をうかがわせる。

小結 中山王窯跡群は、炭焼窯跡を中心とするD地点と須恵器窯跡を中心とするA・B・C地点に大きく分けられる。

炭焼窯跡は、小杉町県民公園太閤山ランド内遺跡群〔関他1983〕や小杉流団内の遺跡群〔上野他1982〕で多数発見されており、これらの窯跡の存在する遺跡には、鉄製鍊を行なった製鉄跡が同時に存在することが多く中山王地内においても製鉄遺跡の存在が推測される。

須恵器窯跡は、ほぼ150mの間隔で3地点にみられる。各地点では、比較的広い範囲に遺物が散布しており数基づつの窯跡が存在すると考えられる。また、これら窯跡の存続時期は出土遺物から6世紀末～8世紀初頭の約100年ほどの間に断続的に操業されたと推測される。この古墳時代から古代に至る窯跡群は、瓦陶兼業窯の存在など今後、生産された須恵器を初め瓦等がどこへ供給されていたかが課題となろう。

（酒井・高慶）

IV 調査の成果

1. 造構について（第8図・表1）

本年度の調査で、弓庄城跡の調査は第4次までを終了した。調査した範囲は、A地点、1・2・3・4・5・6・7・8区（以下A-2区のように略す）B-1・2・3・4・5区、C-1・2区、D地点、E-1・2・3区、F地点に分けられる。しかし、これらの地区的造構がすべて城跡に関連するかどうかは明確ではない。またC地点の調査も第5次調査を待たねばならないが、本年度までの調査成果をまとめ、遺跡の性格を整理してみたい。

掘立柱建物 掘立柱建物は、一次から四次までの調査で63棟を検出した（以下建物とする）。建物は大半の調査区で検出され、2間×2間以上の建物はE-3区SB294を除いてすべて総柱構造である。規模は1間×1間5棟（A-8区SB27・28）、2間×1間24棟（A-1区SB104他）、3間×1間4棟（A-5区SB318他）、2間×2間6棟（E-3区SB602他）、3間×2間6棟（E-3区SB293他）、3間×3間3棟（B-3区SB602他）、4間×3間8棟（B-4区SB701他）、4間×4間3棟（A-5区SB304他）の8種類がある。建物のうち最もよく見られるのは2間×1間の建物で、A-1区SB102・104のように井戸や土塙に付属して検出されることが多く、水屋的な建物を想起させる。3間×3間以上の大きな建物は、現在のところ、A-5区とB地点で見られるが、他の部分では検出されなかった。これらの建物は計14棟あるが、溝や堀で区画される部分では1棟から2棟しか検出されず、2間×1間・2間×2間の建物、井戸などとともに建物群を形成する。このことから区画内の中核的な建物であると考えられる。3間×1間の建物は、土塙をともなうA-5区SB318などをはじめとして、その大きさ、形態に統一性がなく、小屋、廁、櫓などの特殊な建物と考えられる。

建物の間尺は完数尺（1尺が30cm）で4尺から19尺までを使用している。このうち最もよく使用されているのは、8尺・9尺・10尺で、63棟のうち33棟に見られる。こうした建物は、4例を除いて、B地点、A-1区、A-3・5区に集中している。これらの地区では、B-4区SB602の桁9尺×4回、梁8尺×3回のように同一尺を連続して使用する建物が32棟を数え、柱穴の直径も30cm前後でほぼ一定し、統一性を感じさせる。これに対して、E地点、A-6・7・8区では、同一尺を連続して使用する例はあるものの間尺は4尺から17尺までを使用しており、統一性を感じさせない。間尺からみて廁を持つと考えられる建物は、A-8区SB29、C-2区SB032、E-1区SB045、F地点SB524の4棟で、他の建物には、廁が付かないものと考えられる。面積（桁×梁）は1間×1間から3間×2間の建物では統一性を感じさせないが、大きな建物では3間×3間、平均約58m²、4間×3間、平均約75m²、4間×4間、平均約103m²で、ほぼ一定であった。

建物の方位は、北より東西へ10度以内（24棟）、東西へ11度から20度（15棟）、東西へ21度から70度（8棟）、東西へ71度から80度（7棟）、81度から90度（8棟）と一定ではない。しかし、21度から70度のものを除いて、遺跡の立地する白岩川右岸の河岸段丘に対しておおむね平行、あるいは直角の方向である。

井戸・樋・堀・その他 井戸はこれまで34基検出している。しかし、井戸かどうか判断のつかない土塙もあり、その実数については明確ではない。規模は、直径約1m～2m、深さ約1.5m～3mと大小さまざまであるが、井戸が深くなれば、直径も比例して大きくなる傾向がある。井戸は基本的に素掘りであるが、井側に石組みを施すもの、木製や石製の井桁を組むものなどもある。素掘りの井戸が立地する地山の土質は、固く、井戸の崩壊も認められない。これに対して、井側に石組みを施すものは、その立地する地山の土質が軟弱で、井戸を補強したものと考えられる。井戸はA地点・C地点・E地点で多数検出されたが、B地点では検出されなかった。

樋は13箇所を検出している。樋は建物と溝に付随する2種類がある。建物に付属するものには、A-5区SB303につくSA337、B-3区SB601につくSA605、SB604につくSB606、B-4区SB702につくSA704、E-3区SB291に

つくSA292の6例があり、目隠しの柵などと考えられる。これらの柵は建物の桁・梁を問わず付随し、方向も規則性をもたない。また間隔も建物によって制約を受けないものが多い。しかし、桁や梁の長さに対しては、ほぼ同一の長さを持っている。このことから、柵は建物が築造された後、建物の機能や大きさなどに合わせて作られていると考えられる。溝に付随するものには、C-2区SD001につく柵SA036・037・038がある。これらの柵は、溝の方向に対し平行に築かれており、郭を区画する際、遮蔽物も築いていたことが考えられる。

堀は城の外周を区画する、D地点SD001、F地点SD510などがある。堀には内部を区画するものもあると思われるが、現段階では溝との区別が判然としない。堀は幅4m～7m、深さ1.5～2mで断面形が「U」字形を呈する。土止め用の石組みは見られないが覆土内に50cm前後の石が数多く含まれており、その存在をうかがわせている。柵は断面に砂礫層が認められ、水が流れていたものと考えられる。空堀りは現在まで検出されていない。堀に付随する施設にはD地点の土塁がある。土塁は本丸西側の白岩川河岸段丘直下に築かれており、その内側が堀となっている。

溝は、郭を区画するもの、造構を区画するもの、排水用となるものなどがある。郭や造構を区画する溝は幅4m～1m、深さ1m～50cmで、断面形は「U」字形のもの（E-3 SD201他）と二段掘りのもの（A-1 SD119他）の2種がある。排水用となるものには建物に付随しており雨落ちの溝となると考えられる（E-3 SD206他）。

土塁は、すべての調査区で多数検出されるが、その性格について明確に解釈できるものは少ない。しかし、2間×1間の建物に付隨するもの、井戸となる可能性を持つもの、土塁蔭となると考えられるものなども検出されている。このうち井戸となる可能性を持つものとしてはE-3区SK270・271などがある。直径約1m前後で深さは90cm前後であるが、湧水層まで掘り下げられておらず、雨水などをためたものかもしれない。こうした例は比較的多く、A-5区、A-3区などでも見受けられる。

まとめ

以上、弓庄城跡より検出された造構について、整理すると次の2点である。

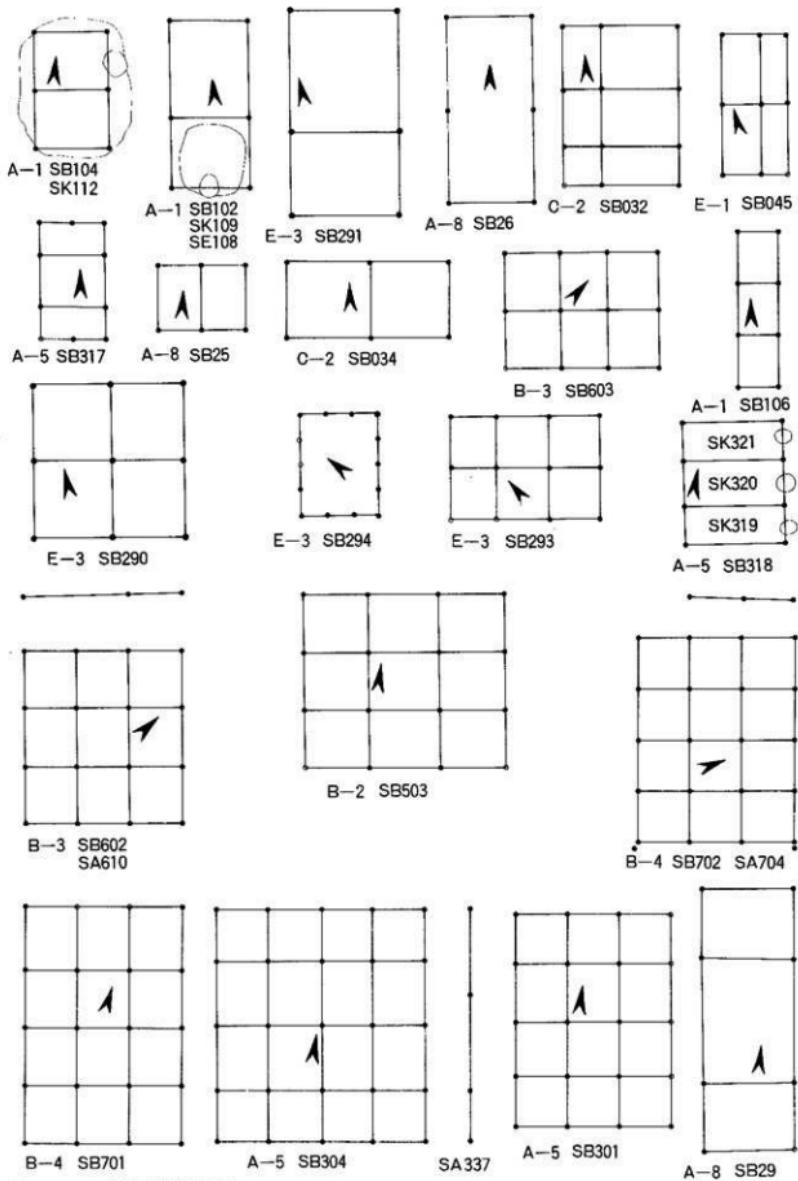
- ①、3間×3間以上の大きな建物は、B地点・A-1区、A-3・5区に集中し他の地区ではあまり見られない。
- ②、B地点・A-1区、A-3・5区の建物は、8尺から10尺の間尺を連続して使用する傾向が強く、柱穴の径も30cm前後のもので規則性がある。しかし、他の地区ではこのような規則性は認められない。

ここで各地点を古城図に対応させると、B地点・A-1区は本丸から北へ3番目の郭（以下第3の郭）A-2・3・4・5区は第3の郭の西側外郭部分、A-6・7・8区・C地点は第2の郭、E地点は本丸南側の郭となる。上述の要素から郭について述べれば、第3の郭の建物には規則性があるが、第2の郭と本丸南側では、このような規則性がないといえる。第3の郭のような規則性を持つ建物は、立山町若宮B遺跡、上市町神田遺跡、江上B遺跡などで見られ、鎌倉時代前半から室町時代前半に位置づけられている。これに対して本丸南側の郭などで見られる間尺の一定しない建物は、福光町香城寺遺跡で検出された室町時代後半の建物に類似している。以上から弓庄城内の建物は、第3の郭を中心とする鎌倉時代後半から室町時代前半の建物群と、それ以外の地区で見られる室町時代後半の建物群に大きく分けることができると考えられる。弓庄城は文献などから、15世紀から存在していたことがうかがわれるが、それ以前からも、何らかの施設があったものと考えられる。

弓庄城では今まで、礎石を持つ建物は検出されていないが、井戸や溝などから50cm前後の火を受けた偏平な石が検出されること、ほぼ同時代の富山市白鳥城で礎石をもつ建物が検出されていることなどから今後検出される可能性を持つものと考えられる。

以上であるが、本遺跡において中世後半の建物は、柱穴が検出される数に対して復元できる建物の数は少ない。これは県内の中世後半の遺跡（小矢部市日の宮遺跡・魚津市早月上野遺跡他）に見られる傾向で、中世の建物を語る上で見のがせない点といえよう。

（高慶）



第8図 据立柱建物概念図

表1. 建物・構一覧表

番号	調査概要	地区名	通構名	棟・橋の方向	方 向	柱間数 桁×梁	規 模m: 桁×梁(尺)	柱 間 m (尺)		備 考
								柱 行	梁 行	
1	第1次	A-7	SB19	東 西	N-5°-E	2 × 1	3.3×1.8 (11) (6)	1.8+1.5 (6) (5)	1.8 (6)	
2	*	*	SA20	南 北	N-44°-E	4	5.7 (19)	1.5+1.5+1.5+1.2 (5) (5) (5) (4)		
3	*	*	SA21	南 北	N-35°-E	2	3.9 (13)	1.8+2.1 (6) (7)		
4	*	*	SA22	東 西	N-57°-E	3	5.4 (16)	1.5+1.8+2.1 (5) (6) (7)		
5	*	*	SA23	南 北	N-11°-E	2	4.2 (14)	2.1+2.1 (7) (7)		
6	第2次	A-1	SB101	南 北	N-4°-E	2 × 1	7.8×5.7 (26) (19)	3.9+3.9 (13) (13)	5.7 (19)	
7	*	*	SB102	南 北	N-6°-E	2 × 1	7.8×3.6 (26) (12)	4.5+3.3 (15) (11)	3.6 (12)	
8	*	*	SB103	南 北	N-45°-W	2 × 1	5.4×3.0 (18) (10)	2.1+3.3 (7) (11)	3.0 (10)	
9	*	*	SB104	南 北	N-7°-W	2 × 1	5.4×3.3 (18) (11)	2.7+2.7 (9) (9)	3.3 (11)	
10	*	*	SB105	南 北	N-1°-W	2 × 1	4.8×3.6 (16) (12)	2.4+2.4 (8) (8)	3.6 (12)	
11	*	*	SB106	南 北	N-2°-E	3 × 1	7.2×1.8 (24) (6)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	1.8 (6)	
12	*	A-3	SB201	東 西	N-70°-W	3 × 2	6.6×5.4 (22) (18)	2.1-2.1+2.4 (7) (7) (8)	2.7+2.7 (9) (9)	
13	*	A-5	SB301	南 北	N-9°-W	4 × 3	10.7×7.2 (34) (24)	2.4+2.7+2.7-2.4 (8) (9) (9) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
14	*	*	SB302	南 北	N-5°-W	2 × 1	9.6×5.4 (32) (18)	7.2+2.4 (24) (8)	5.4 (18)	
15	*	*	SB303	南 北	N-9°-W	4 × 4	10.8×9.6 (36) (32)	2.4+3.6+3.0+2.4 (8) (10) (10) (8)	2.4+2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	
16	*	*	SB304	南 北	N-11°-W	4 × 4	10.8×9.6 (36) (32)	2.4+3.6+3.0+2.4 (8) (10) (10) (8)	2.4+2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	
17	*	*	SB313	東 西	N-78°-E	2 × 1	4.8×2.7 (36) (32)	2.4+2.4 (8) (8)	2.7 (9)	
18	*	*	SB315	南 北	N-6°-E	2 × 1	6.0×3.0 (20) (10)	3.0+3.0 (10) (10)	3.0 (10)	
19	*	*	SB316	南 北	N-1°-E	2 × 1	7.2×3.9 (24) (13)	3.6+3.6 (12) (12)	3.9 (13)	
20	*	*	SB317	南 北	N-2°-W	3 × 2	5.4×3.0 (18) (10)	1.5+2.4+1.5 (5) (8) (5)	1.5-1.5 (5) (5)	
21	*	*	SB318	南 北	N-13°-W	3 × 1	5.7×4.5 (19) (15)	1.8+2.1+1.8 (6) (7) (6)	4.5 (15)	
22	*	*	SA336	南 北	N-10°-W	4	13.5 (45)	2.4+3.3+5.4+2.4 (8) (11) (18) (8)		SB303につく
23	*	*	SA337	南 北	N-11°-W	3	11.1 (37)	4.2-4.5+2.4 (14) (15) (8)		SB304につく
24	*	A-8	SB24	東 西	N-85°-E	2 × 2	4.8×3.3 (16) (11)	2.4+2.4 (8) (8)	3.3 (11)	
25	*	*	SB25	東 西	N-85°-E	2 × 2	4.2×3.0 (14) (10)	2.1+2.1 (7) (7)	3.0 (10)	
26	*	*	SB26	南 北	N-2°-W	2 × 2	8.4×3.9 (28) (13)	4.2+4.2 (14) (14)	3.9 (13)	
27	*	*	SB27	東 西	N-90°-E	1 × 1	4.8×3.3 (16) (11)	4.8 (16)	3.3 (11)	
28	*	*	SB28	東 西	N-88°-E	1 × 1	4.2×3.0 (14) (10)	4.2 (14)	3.0 (10)	
29	*	*	SB29	南 北	N-6°-W	3 × 1	12.3×4.2 (41) (14)	3.3+5.7+3.3 (11) (19) (11)	4.2 (14)	
30	*	*	SB30	南 北	N-18°-E	2 × 1	6.6×4.2 (22) (14)	3.3+3.3 (11) (11)	4.2 (14)	
31	*	B-1	建 物	南 北	N-54°-W	2 × (1-2)	4.8 (13)	2.4+2.4 (8) (8)	1.8 (6)	
32	第3次	B-2	SB501	南 北	N-12°-W	2 × 1	6.0×2.1 (20) (7)	3.0-3.0 (10) (10)	2.1 (7)	
33	*	*	SB502	東 西	N-79°-E	2 × 1	4.8×2.4 (16) (8)	2.4+2.4 (8) (8)	2.4 (8)	
34	*	*	SB503	南 北	N-9°-W	3 × 3	9.3×6.1 (31) (20)	3.0+3.3+3.0 (10) (11) (10)	2.7+2.7+2.7 (9) (9) (9)	
35	*	*	SB504	東 西	N-78°-E	4 × 3	9.6×8.1 (32) (27)	2.4+2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	3.0+3.0+2.1 (10) (10) (7)	
36	*	*	SB505	南 北	N-53°-E	4 × 3	9.6×8.4 (32) (28)	2.4+2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	3.0+3.0+2.8 (10) (10) (8)	
37	*	*	SB506	南 北	N-77°-E	4 × 3	9.9×7.2 (33) (24)	1.8+3.0+3.0+2.1 (6) (10) (10) (7)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
38	*	B-3	SB601	南 北	N-17°-W	4 × 4	12.0×9.9 (40) (33)	3.0+3.0+3.0+3.0 (10) (10) (10) (10)	2.4+2.4+2.7+2.4 (8) (8) (9) (8)	

番号	調査 概要	地区名	造構名	橋・橋の 方向	方 向	柱 間 距 离	柱 間 数	規 格 m 幅×梁(尺)	柱 間 m (尺)		備 考
									格 行	梁 行	
39	第3次	B-3	SB602	北 西	N-48°-W	4 × 3	10.5×7.2 (35) (24)	2.7+2.7+2.7+2.7 (9) (9) (9) (9)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
40	*	*	SB603	北 東	N-47°-E	3 × 2	7.3×5.4 (24) (18)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.7+2.7 (7) (9)	2.7+2.7 (7) (9)	
41	*	*	SB604	北 東	N-33°-E	2 × 1	4.8×2.1 (16) (7)	2.4+2.4 (8) (8)	2.1	2.1	
42	*	*	SA605	東 西	N-15°-E	4	9.9 (33)	2.4+1.2.4+2.7+2.4 (8) (8) (9) (8)			
43	*	*	SA606	東 西	N-63°-E	2	4.8 (16)	2.4+2.4 (8) (8)			
44	*	B-4	SB701	南 北	N-17°-E	4 × 3	11.1×7.2 (37) (24)	3.0+2.7+2.7+9.7 (10) (9) (9) (9)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
45	*	*	SB702	東 西	N-72°-E	4 × 3	9.6×7.2 (32) (24)	2.4+2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
46	*	*	SB703	東 西	N-82°-W	2 × 1	4.8×3.0 (16) (10)	2.4+2.4 (8) (8)	3.0 (10)	3.0 (10)	
47	*	B-5	SB801	北 西	N-22°-W	3 × 3	8.1×7.2 (27) (24)	2.7+2.7+2.7 (9) (9) (9)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
48	*	*	SA802			2	4.8 (16)	2.4+2.4 (8) (8)			
49	*	C-1	SB901	北 西	N-26°-W	3 × 3	8.1×7.2 (27) (24)	2.7+2.7+2.7 (9) (9) (9)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	
50	第4次	C-2	SB031	東 西	N-88°-W	2 × 1	8.1×3.3 (27) (11)	5.1+3.0 (17) (10)	3.3 (11)	3.3 (11)	
51	*	*	SB032	南 北	N-4°-W	3 × 2	7.5×5.4 (25) (18)	3.0+2.7+1.8 (10) (9) (6)	1.8+3.6 (6) (1.2)	1.8+3.6 (6) (1.2)	
52	*	*	SB033	東 西	N-82°-W	2 × 2	6.9×4.2 (23) (14)	3.3+3.6 (11) (12)	2.1+2.1 (7) (7)	2.1+2.1 (7) (7)	
53	*	*	SB034	東 西	N-1°-W	2 × 1	7.5×3.6 (25) (12)	3.6+3.9 (12) (13)	3.6 (12)	3.6 (12)	
54	*	*	SB035	東 西	N-83°-W	2 × 2	5.7×4.5 (19) (15)	2.7+3.0 (9) (10)	4.4 (15)	4.4 (15)	
55	*	*	SA036	東 西	N-84°-E	3	5.7 (19)	1.8+2.1+1.8 (6) (7) (6)			
56	*	*	SA037	東 西	N-84°-E	3	5.4 (18)	1.8+1.8+1.8 (6) (6) (6)			
57	*	*	SA038	東 西	N-88°-W	3	5.7 (19)	2.1+1.8+1.8 (7) (6) (6)			
58	*	E-1	SB045	南 北	N-14°-E	2 × 2	6.6×3.0 (22) (10)	3.3+3.3 (11) (11)	1.8+1.2 (6) (4)	1.8+1.2 (6) (4)	
59	*	*	SB046	南 北	N-27°-E	2 × 1	2.7×1.2 (9) (4)	1.5+1.2 (5) (4)	1.2 (4)	1.2 (4)	
60	*	*	SB047	東 西	N-64°-W	2 × 1	3.6×4.4 (12) (8)	1.8+1.8 (6) (6)	2.4 (8)	2.4 (8)	
61	*	*	SB048	南 北	N-68°-E	3 × 2	8.1×3.9 (27) (13)	2.1+3.0+3.0 (7) (10) (10)	2.7+1.2 (9) (4)	2.7+1.2 (9) (4)	
62	*	F	SB504	南 北	N-1°-E	2 × 1	4.8×3.0 (16) (10)	2.4+2.4 (8) (8)	3.0 (10)	3.0 (10)	
63	*	*	SB523	南 北	N-3°-E	4 × 2	10.2×4.8 (34) (16)	2.4+2.7+2.7+2.4 (9) (9) (9) (9)	2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	2.4+2.4 (8) (8) (8) (8)	西側へのびる
64	*	*	SB524	東 西	N-6°-W	4 × 3	8.4×4.7 (28) (24)	1.5+2.7+2.7+1.5 (5) (9) (9) (5)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	2.4+2.4+2.4 (8) (8) (8)	西側へのびる
65	*	E-3	SB289	南 北	N-11°-E	2 × 2	8.4×7.2 (28) (24)	4.5+3.9 (15) (13)	3.6+3.6 (12) (12)	3.6+3.6 (12) (12)	
66	*	*	SB290	南 北	N-11°-E	2 × 2	7.2×6.9 (24) (23)	3.6+3.6 (12) (12)	3.6+3.6 (12) (11)	3.6+3.6 (12) (11)	
67	*	*	SB291	南 北	N-11°-E	2 × 1	9.6×5.1 (32) (17)	5.7+3.9 (19) (13)	5.1 (17)	5.1 (17)	
68	*	*	SA292	南 北	N-84°-W	2	6.0 (20)	3.0+3.0 (10) (10)			
69	*	*	SB293	東 西	N-51°-W	3 × 2	6.9×4.8 (23) (16)	2.1+2.4+2.4 (7) (8) (8)	2.4+2.4 (8) (8)	2.4+2.4 (8) (8)	
70	*	*	SB294	東 西	N-40°-W	4 × 4	4.8×4.8 (16) (16)	1.2+1.2+1.2+1.2 (4) (4) (4) (4)	1.2+1.2+1.2+1.2 (4) (4) (4) (4)	1.2+1.2+1.2+1.2 (4) (4) (4) (4)	外柱のみ
71	*	*	SB295	東 西	N-82°-W	2 × 1	6.6×3.0 (22) (10)	3.3+3.3 (11) (11)	3.0 (10)	3.0 (10)	東側へのびる
72	*	*	SB296	東 西	N-75°-W	3 × 1	8.1×3.3 (27) (11)	2.7+2.7+2.7+2.7+... (9) (9) (9) (9) (11)	3.3 (11)	3.3 (11)	東側へのびる
73	*	*	SB297	南 北	N-20°-E	2 × 2	5.4×5.1 (18) (11)	2.7+2.7 (9) (9)	2.4+2.7 (8) (9)	2.4+2.7 (8) (9)	
74	*	*	SB298	南 北	N-1°-E	2 × 1	7.5×3.6 (25) (12)	3.6+3.9 (12) (13)	3.6 (12)	3.6 (12)	
75	*	*	SB299	東 西	N-6°-W	1 × 1	3.6×4.5 (12) (15)	3.6+4.5 (12) (12)	4.5 (15)	4.5 (15)	東側へのびる
76	*	*	SB300	東 西	N-77°-W	1 × 1	3.6×3.3 (12) (11)	3.6+4.5 (12) (11)	3.3 (11)	3.3 (11)	東側へのびる

(柱間の数値は、東西棟では北西隅、南北棟では北東隅、東西棟は西より、南北棟は北よりの計測値を示した。
方位は、南北、東西両棟に関係なく、真北に対してふれる角度を示した。)

2. 土師質土器について

第1次から第4次調査までに出土した土師質土器は鎌倉時代から戦国時代にわたっている。器種は大部分は皿形で僅かに楕形がある。しかし皿形が楕形か明確でないものもあるので、一括して分類した。

土師質土器は成形技法から回転糸切り技法のもの（A類）と手づくねのもの（B類）がある。

A類（1～16）は口縁部に丁寧なヨコナデ調整で、内面にナデ調整を施す。

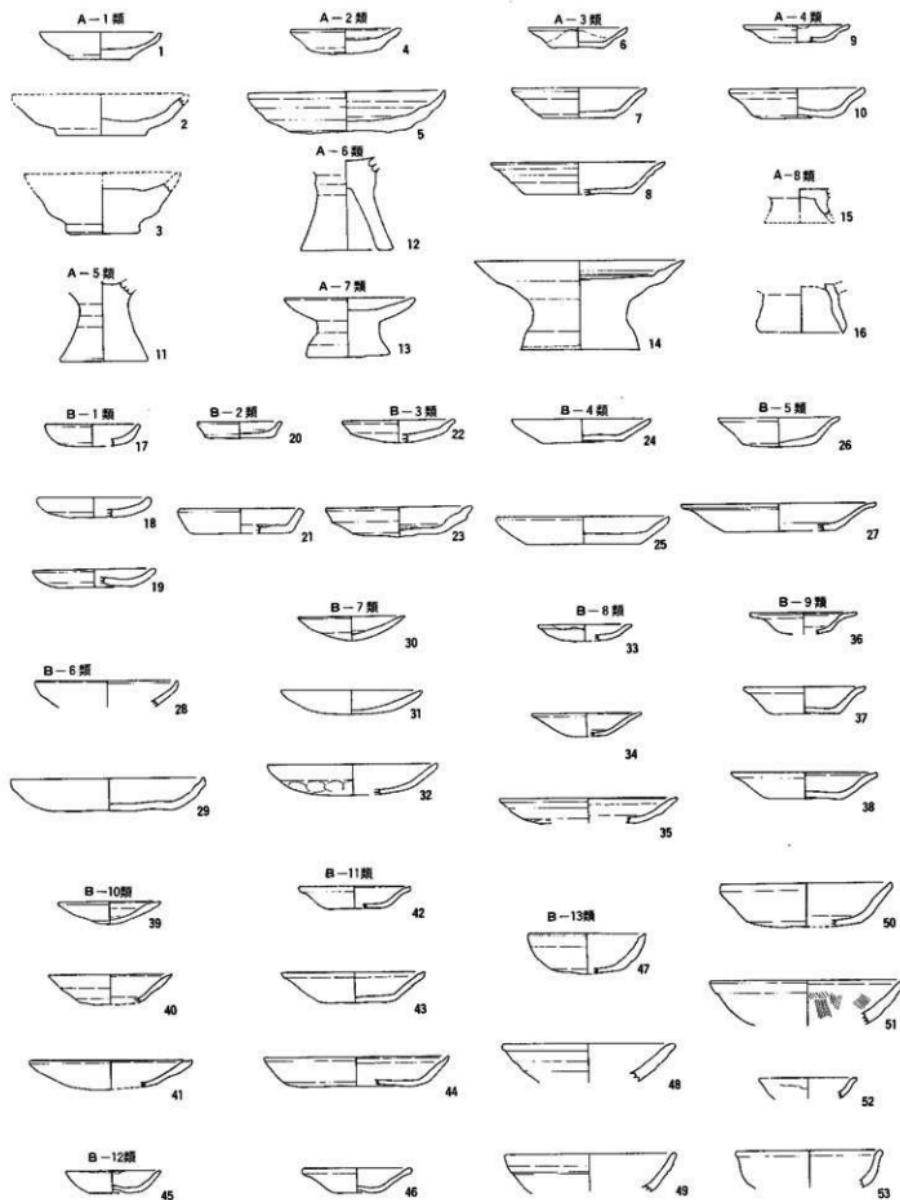
A-1類は底部を僅かに高台状につくり出す皿形である。口縁部はやや内湾するものと外反するものがある。3は楕形のものでA-7類に近い。A-2類は平坦な底面から口縁部が外反する皿形である。A-3類は薄づくりの口縁部が外に反する皿形である。8は外底面に糸切り後ナデ調整が見られる。A-4類は口縁部はやや強いヨコナデ調整のため、外へ少し開き気味になる皿形である。口縁端部の外面は面取りしている。A-5類は高台付の皿形である。高台は高く三角形のものと円柱状のものがある。A-6類はA-5類の高台が中空になった皿形で、高台内面はナデ調整を行う。A-7類はA-5類より低い高台付の皿形である。高台に強くヨコナデ調整を行うものもある。A-8類はA-7類の高台の中空になった皿形である。A-5～8類には外側に油煙を残すものは確認されていない。

B類（17～53）は口縁部外面の上半にヨコナデ調整を行い、下半には指頭圧痕を残すものやその圧痕を消すためのナデ調整を行うものがある。内面にはナデ調整を行う。

B-1類はやや内湾する低い口縁部がつく皿形である。底面は平坦でなく、器壁が厚い。B-2類は平坦な底部で、直立する短い口縁部に強いヨコナデ調整を行う皿形である。型押しのため、内底面に段ができる。B-3類は底面は平坦でなく、口縁端部に強いヨコナデ調整を行うため、外面に棱がつく皿形である。B-4類は外反する口縁の端部外面を面取りする皿形である。外底面はヘラによるナデ調整のため平坦である。B-5類はB-4類の口縁端部が外へ開く皿形である。B-6類はやや内湾する口縁の端部外面を面取りする皿形である。B-7類は丸底で、口縁端部はとがる皿形である。B-8類は丸底で口縁端部が外へ開く皿形である。B-9類は平底で口縁端部が大きく外へ開き、逆陣笠状になる皿形である。B-8・9類の中には口縁端部のつまみ上げを消しているものもある。B-10類は丸底で口縁端部を少しつまみ上げる皿である。口縁端部が少しふくれる。B-11類はB-10類の平底のもので、口縁端部はふくれていない。B-12類は凹み底の皿形である。B-13類は楕形のものを一括した。口縁部が内湾するもの(47)、外反するもの(48・49)、口縁端部を面取するもの(50)、端部をややとがらすもの(51)、口縁端部が少しS字状になるもの(52・53)がある。47はB-1類、50はB-6類、51はB-8類の大型の楕。

以下、土師質土器の編年的位置づけを考えてみたい。2次調査A地点5区のSB 301の柱穴からA-1・8類と12世紀中葉以降の龍泉窯系青磁碗が出土している。同調査A地点3区のSE 204からA-1、B-1類と13世紀前半の珠洲の壺・擂鉢が出土している。また、じょうべのま遺跡のC地区【山本1982】では珠洲Ⅱ期に伴う土師質土器がA-1・5・10、B-1類である。2次調査A地点7区のP15でB-9・10類、P14でB-8・9・11類が出土している。同SD 02出土のヘラ先による細線の蓮弁文青磁碗から、B-10類は15世紀後半～16世紀になろう。日の宮遺跡【上野1978】のC地区の11区井戸02から、B-2・3・8類が出土、共伴の珠洲の擂鉢から15世紀前半であろう。中小泉遺跡【狩野1981】のSD 01ではB-3・10類と共に15世紀前半の珠洲の擂鉢が出土している。2次調査A地点1区のSK 114から出土したB-7類は青磁楕と珠洲甕より16世紀前半になろう。B-11類は白鳥城【藤田1981】や増山遺跡【久々1978】（17世紀前半の伊万里楕と共伴）の出土例から16世紀後半から17世紀前半まで見られる。以上から考えて、A類・B-1類は12世紀後半から13世紀前半まで、B-2・3類は15世紀前半から、B-8～11類は15世紀から16世紀まで、特にB-11類は16世紀から17世紀前半まで見られる。なお、糸切り技法を13世紀前半までとする出土例【四柳1980】や中世を通じて見られるとする出土例【齊木1983】がある。地域差を考慮しなければならないが、A-3・4類は13世紀前半以降にくだる可能性がある。

（宮田）



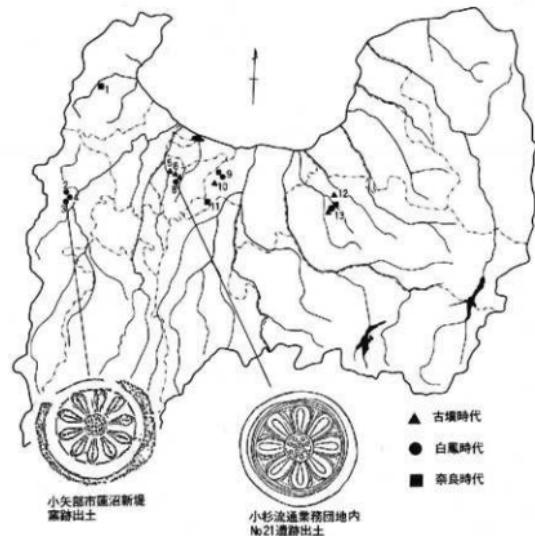
第9図 土質質土器分類図 (1/4)

3. 中山王窯跡群について

館中山王窯跡群の各地区における年代について述べたい。A地区第1灰層では、杯身口縁端部の特徴は、やや上向きに外方し小さく伸びる受部をもち、立ち上がりは、低く内傾する。小杉流通業務団地内No.7遺跡窯跡〔上野1982〕にみられる様相に類似している。しかし、No.7窯跡群では、立ち上がりが中山王窯にくらべ長く立つものでいくぶん古式の様相をもつと考えられ、中山王窯A地区第1灰層は、No.7窯跡群に後続する時期に位置づけられる。また、A地点第2灰層出土の杯身・杯蓋は、宝珠つまみが小さく高いもので内面にかえりをもちや大形の杯蓋などもみられる。小杉流通業務団地内No.21遺跡第1号窯〔上野他1984〕にみられる様相小形の杯身・杯蓋で宝珠つまみが小さく内面のかえりが大きいものとは異なりより後出的な様相と考えられ、小矢部市西蓮沼窯跡〔西井・伊藤1981〕に類似する。また、C地点にみられる杯蓋も同様の時期と考えられる。B地点の瓦陶兼業窯は、内面にかえりをもたず、口縁端部が小さく鋭く立つもので宝珠つまみが大きく扁平となる。同窯よりやや古式な様相をもつ窯跡としては、富山市金草第1号窯〔藤田他1970〕があり、金草1号窯では、内面にかえりをもつものと口縁端部が小さく鋭く立つ杯蓋が共はんしており、内部にかえりをもたない杯蓋は、B地点出土のものに似る。しかし、B地点出土の杯蓋は、かなり大形のものとみられより後出的な様相といえよう。以上のことから、中山王窯跡群は、A地点第1灰層6世紀末ごろ第2灰層・C地点7世紀中ごろ～後半、B地点7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。中山王窯跡群周辺では、6世紀末の堤谷窯跡、8世紀末～9世紀末の亀谷窯跡がある。これらの窯跡は、中山王窯跡から直線距離で3km前後の丘陵上に立地している。また時代的にも断続的ではあるが堤谷窯・中山王窯→亀谷窯の順で続き、一群をなすと考えられる。

県内では、小矢部市の蟹谷丘陵を中心とする一群（小矢部市長Ⅰ・Ⅱ窯、西蓮沼窯、蓮沼窯など）、射水丘陵を中心

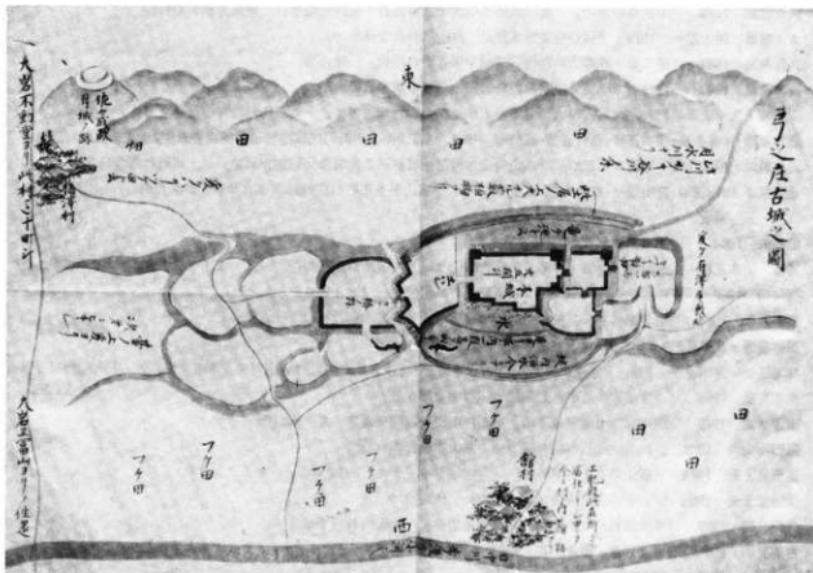
市町村	遺跡名	時代	文献・備考
1 水見市	小窯窯跡	奈良	〔橋本1955〕 磚間にによる 新丸瓦出土
2 小矢部市	山王奥窯跡	白鳳	〔西井1981〕
3 *	蓮沼新堤窯跡	*	〔西井1981〕
4 *	西蓮沼新堤窯跡	*	〔西井1981〕
5 大門町	生源寺窯跡	古墳	〔塙 1964〕
6 *	小杉流通業務団地No.7	*	〔上野他1982〕
7 *	* No.16	*	〔上野他1982〕
8 小杉町	* No.21	白鳳	〔上野他1984〕
9 富山市	金草第一号窯跡	*	龜田正夫氏教示による。
10 *	西金屋センガリ山窯跡	古墳	〔藤田1983〕
11 *	平岡窯跡	奈良	〔同上〕
12 上市町	堤谷窯跡	古墳	〔森 1970〕
13 *	中山王窯跡群	白鳳	



第10図 県内瓦窯・須恵器窯分布図

とする一群（大門町生源寺窯、小杉町流通業務団地内No.6・7・21遺跡など）、鳥羽丘陵を中心とする一群（富山市西金屋センガリ山窯、金草窯、古沢窯、法尻窯など）がある。これらはいずれも県西部に位置し、古墳時代後期あるいはその直後にはじまる。その後奈良時代に最盛期を迎え、平安時代に衰退する。これに対して県東部では立山町上末を中心とする群（立山町釜谷窯、法光寺谷窯、上市町亀谷窯）として立山古窯群が奈良時代末から平安時代に操業されていたと考えられている〔藤田1974〕。しかし、中山王窯群の発見により、この地域でも古墳時代後期から奈良時代初頭の窯跡群の存在が明らかとなり、群として見るならば中山王窯を中心とする一群は独自のものと考えられる（仮に上市古窯群と呼ぶ）。中山王窯が衰退期を迎えた後、上末を中心とする地域への移動も考えられるが、平安時代の窯跡には滑川市万年谷遺跡などが確認されており、これを立証する材料は現在のところない。

中山王窯のB地区では須恵器に伴って瓦が検出されており、瓦陶兼業窯の存在をうかがわせている。瓦は白鳳期後半に位置づけられている。瓦を検出する窯跡は、小矢部市蓮沼新堤窯、同山王奥堤窯、小杉流通業務団地内No.21遺跡があり、いずれも白鳳期に位置づけられている〔古岡1983〕。小杉流通業務団地内No.21遺跡第1号窯で生産された瓦は、御亭角遺跡（廃寺）に供給されていた〔西井1983〕。中山王窯の場合、供給地は不明である。（酒井・高慶）

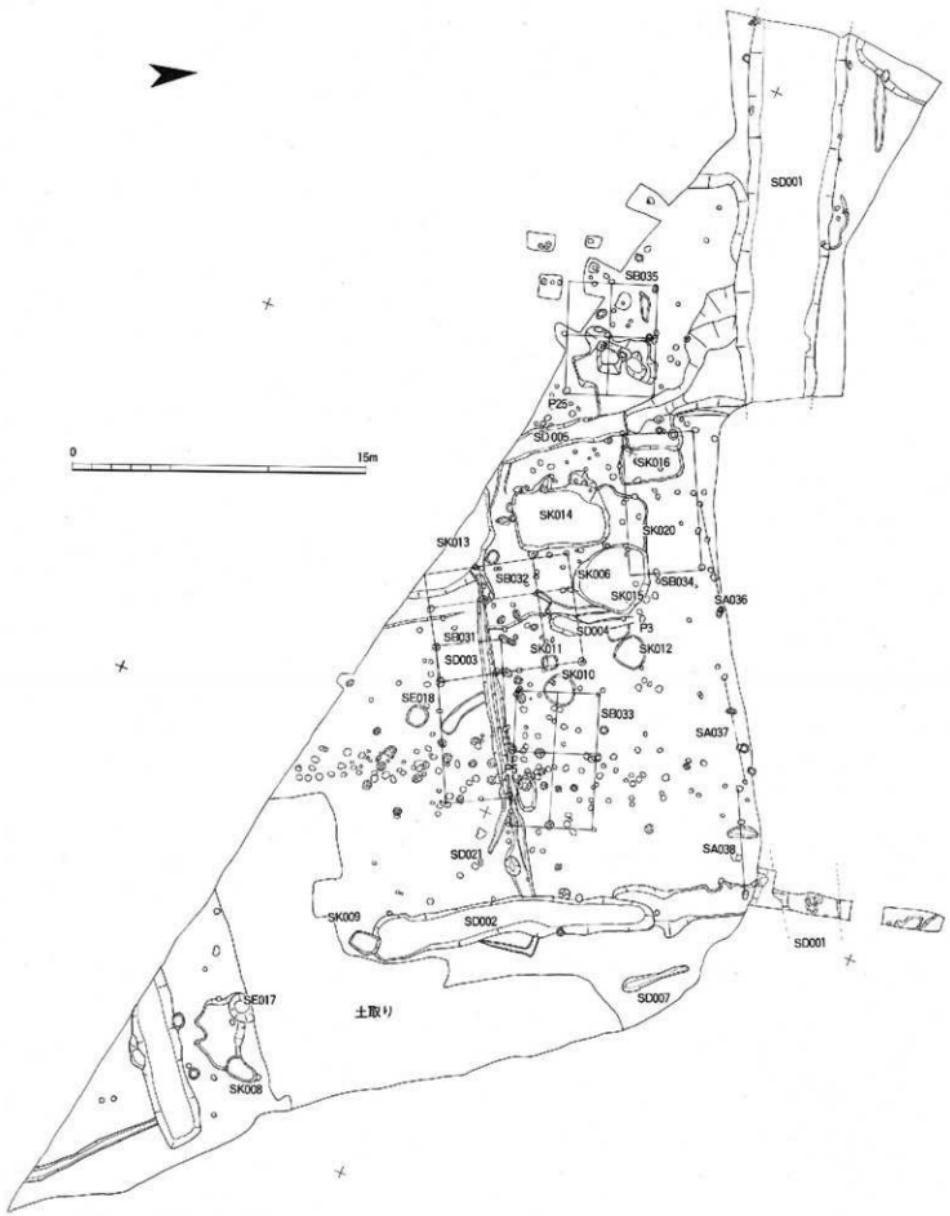


第11図 弓之庄古城之図（土肥家記より）

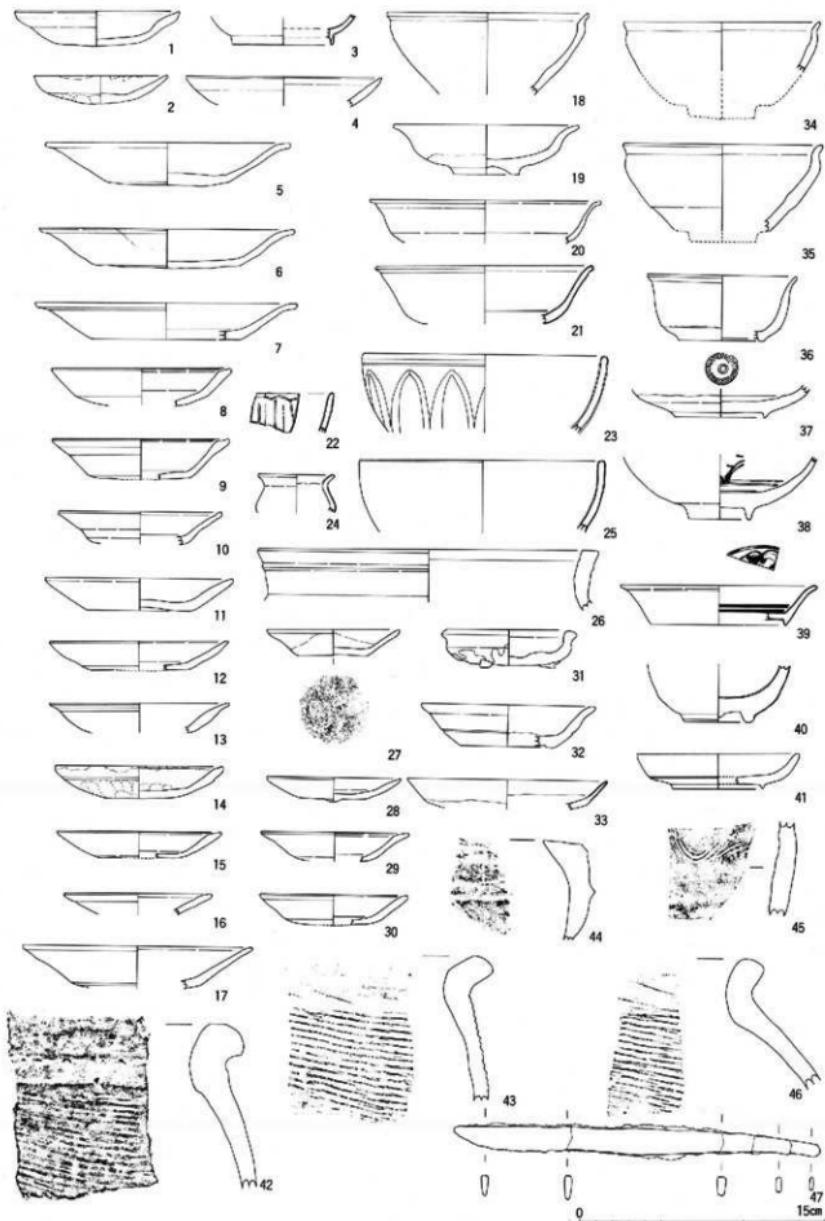
—引用・参考文献—

- ウ 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
上野章・岸本雅敏・池野正男・久々忠義 1978 「富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
上野章・持野證・池野正男・宮田進一・久々忠義 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
上野章・岸本雅敏・山本正敏・齊藤隆 1984 「富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- オ 岡崎卯一・蘿田富士男 1960 「富山市金草第1号窯跡調査報告」 富山市教育委員会
岡崎卯一 1972 「10平岡遺跡」『富山県史考古編』 富山県
小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会
- カ 持野證・橋本正春 1981 「若宮A遺跡」「若宮B遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告書立山町遺構編」 富山県教育委員会
持野證 1981 「中小系遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告書立山町遺構編」 富山県教育委員会
キ 岸本雅敏・山本正敏・酒井重洋 1976 「富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
岸本雅敏 1982 「香城寺遺跡の調査」 福光町教育委員会
京田良志 1976 「富山の石造美術」 巧玄出版
- ク 久々忠義 1978 「中近世の遺物」「富山県砺波市梅壇野遺跡群子備調査概要」 砧波市教育委員会
久々忠義・岡上進一 1979 「越中町安田城跡」 富山県教育委員会
久保尚文 1983 「第二章・莊園史の特色」「越中世史の研究」 桂書房
- サ 齋藤隆・青木秀雄 1983 「研修道場用地発掘調査報告書」 鎌倉市鶴岡八幡宮
齊藤隆・久々忠義 1979 「富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書1」 大沢野町教育委員会
酒井重洋・神保孝造・橋本正春・奥村吉信・高慶孝 1981 「富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
酒井重洋・橋本正春・高慶孝 1982 「富山県上市町弓庄城跡第2次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
酒井重洋・山本正敏・宮田進一・松島吉信・高慶孝 1983 「富山県上市町弓庄城跡第3次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- シ 塩照夫 1964 「生源寺窯跡調査報告書」
- セ 関清・山本正敏・久々忠義 1983 「県民公開太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)」 富山県教育委員会
- タ 高岡徹 1982 「富山県上市町桔梗城と国人士肥氏の城館配置」「かんとりい」No.6
田中照久 1981 「越前編年表」「日本やきもの集成4」 北陸 平凡社
- ニ 西井龍儀・伊藤隆三 1981 「富山大学考古学談話会資料(No.19)」
- ハ 橋本正春・宮田進一 1981 「神田遺跡」「江上B遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告上山町遺構編」 上市町教育委員会
橋本芳雄 1955 「小堀廬寺の心燈と瓦窯址」 越中史壇5号
- フ 藤澤良祐 1976 「瀬戸市出土物編年図」「瀬戸市史」陶磁史篇第二巻 濱戸市
藤田富士夫 1981 「白鳥城跡調査概要」 富山市教育委員会
藤田富士夫 1974 「富山県立山古窯跡群」「考古学ジャーナル」No.97 ニューサイエンス社
藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡 13 富山」 保育社
舟崎久雄 1975 「富山県福光町古窯跡発掘調査概要」 福光町教育委員会
古岡英明・西井龍儀・上野章・橋本正春 1983 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- モ 森秀雄 1970 「堤谷窯跡」「上市町誌」 上市町
森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
ヤ 山本正敏 1982 「IV遺物」「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」 入善町教育委員会
- ヨ 横田賛次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館
吉岡康輔・平田天秋 1976 「第四章・珠洲古窯跡」「珠洲市史」 第1巻 珠洲市
吉岡康輔他 1977 「珠洲法住寺第3分塗」 石川県教育委員会
吉岡康輔 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」「庄内考古学」第18号 庄内考古学研究会
四柳嘉章 1980 「西川島I」「穴水町教育委員会

図 版

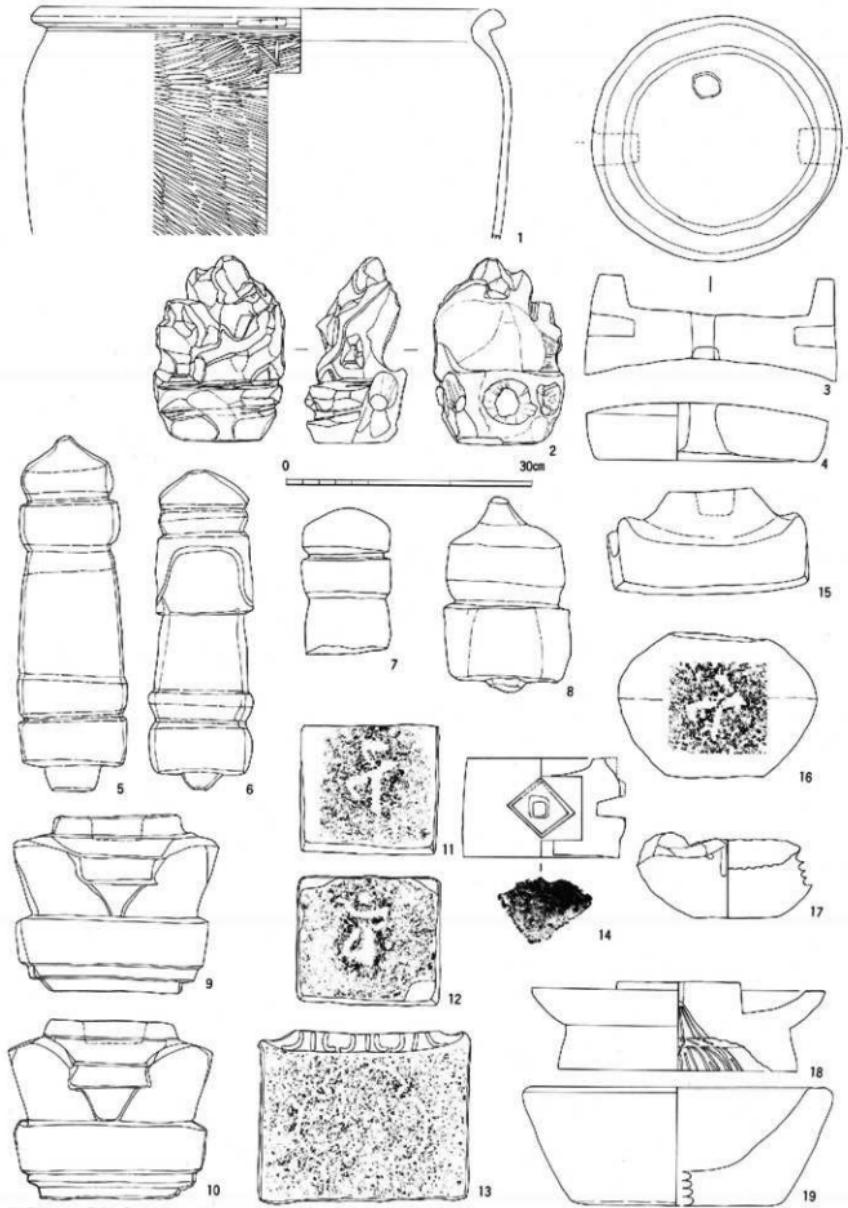


図版1 C地点2区発掘区(1/250)



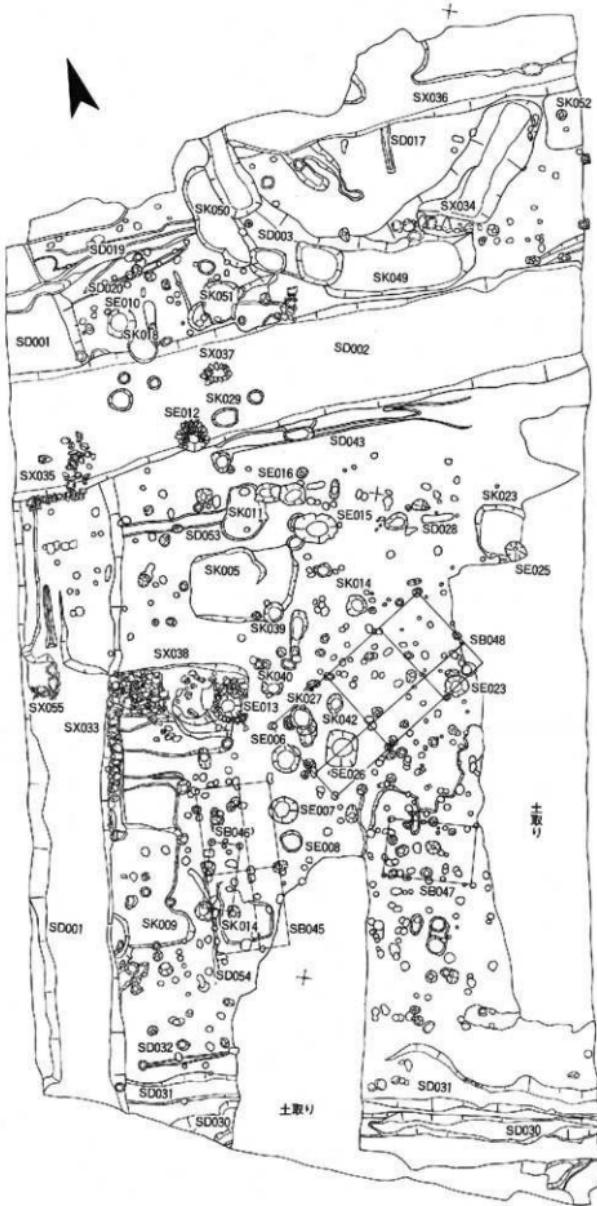
图版2 C地点2区出土遗物 (1/3)

SD001(1·3·18·19) SD002(46) SD003(44) SD004(5·6) SD005(34) SK006(4·47) SE014(42) SE017(28)
SK019(7) SB033(10) P3(2) P5(21) P25(20)

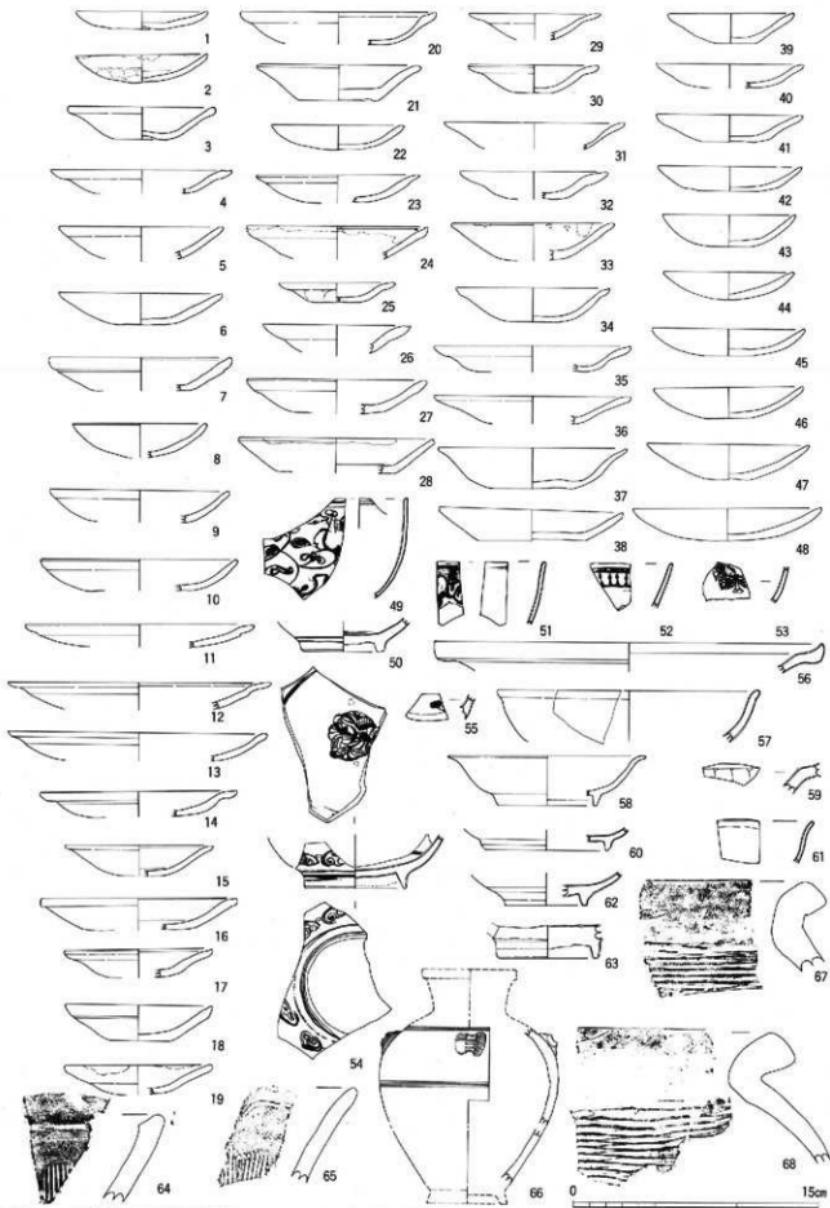


図版3 C地点2区及びE地点1区・3区出土遺物(1/6)

C2(1) E1 SD003(3・4) E1 SE007(17) E3 SD201(6・7) E3 SD211(10-13) E3 SE215(18) E3 SK236(5)
E3 SK237(2) E3 SD276(9-12) E3 SK223(11) E3 SK217(16) E3(14) E1(8・15・19)

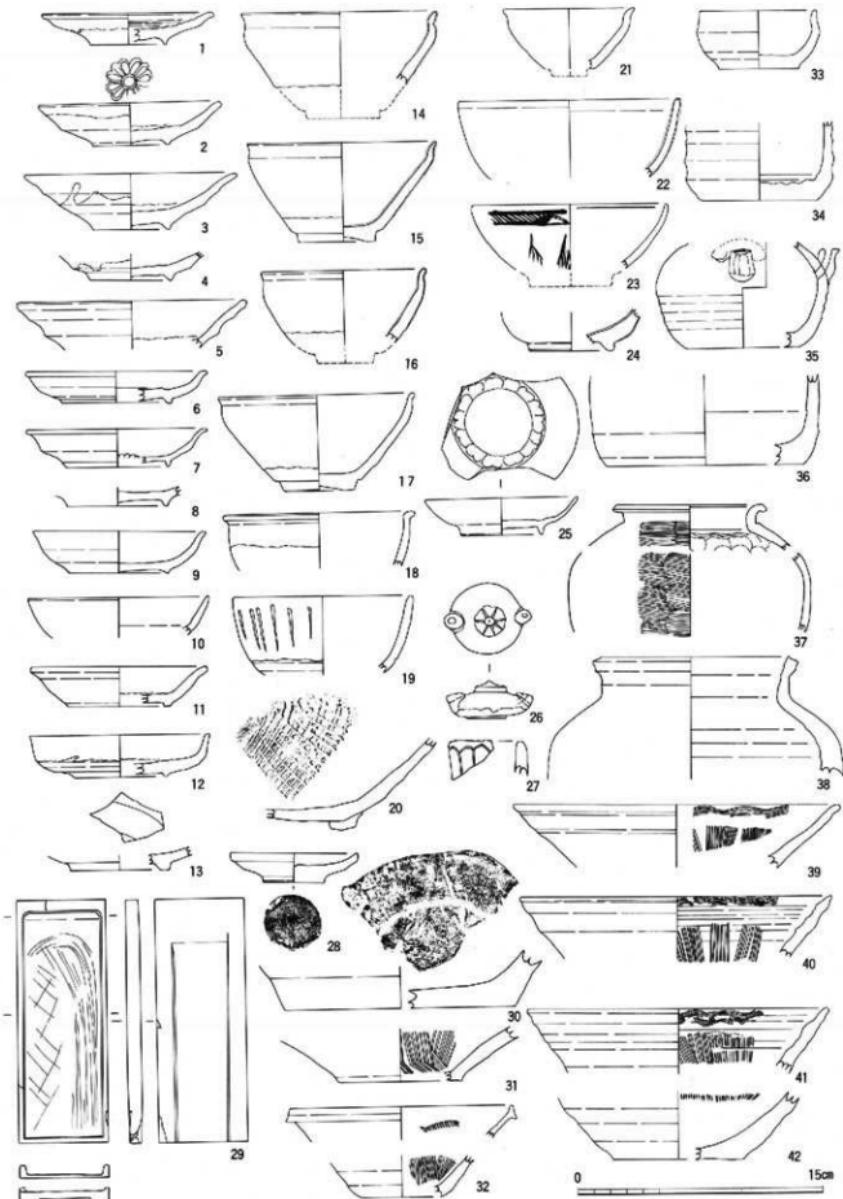


図版4 E地点1区発掘区(1/200)



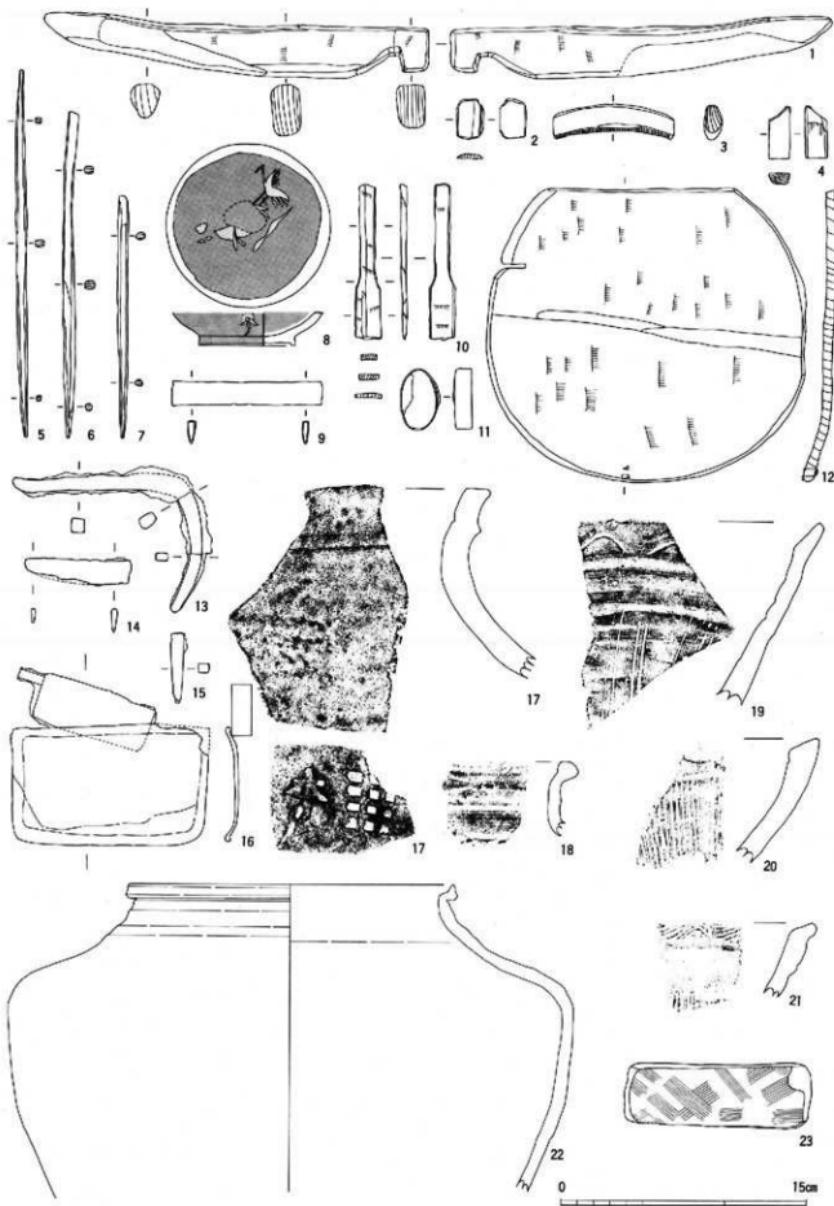
図版5 E地点1区出土遺物 1~65・67・68(1/3) 66(1/6)

SD001(1~6・35・42・49・57・63) SD002(7・53・66) SD003(20・50・52・61) SK005(21) SK009(22・23) SK011(62)
SE015(8~13) SK021(37) SK022(24) SX024(14) SX026(39・46) SD030(25~28・38・51・64) P5(66) P6(15~16・34)
P14(44) P20(17) P23(41) P53(19)



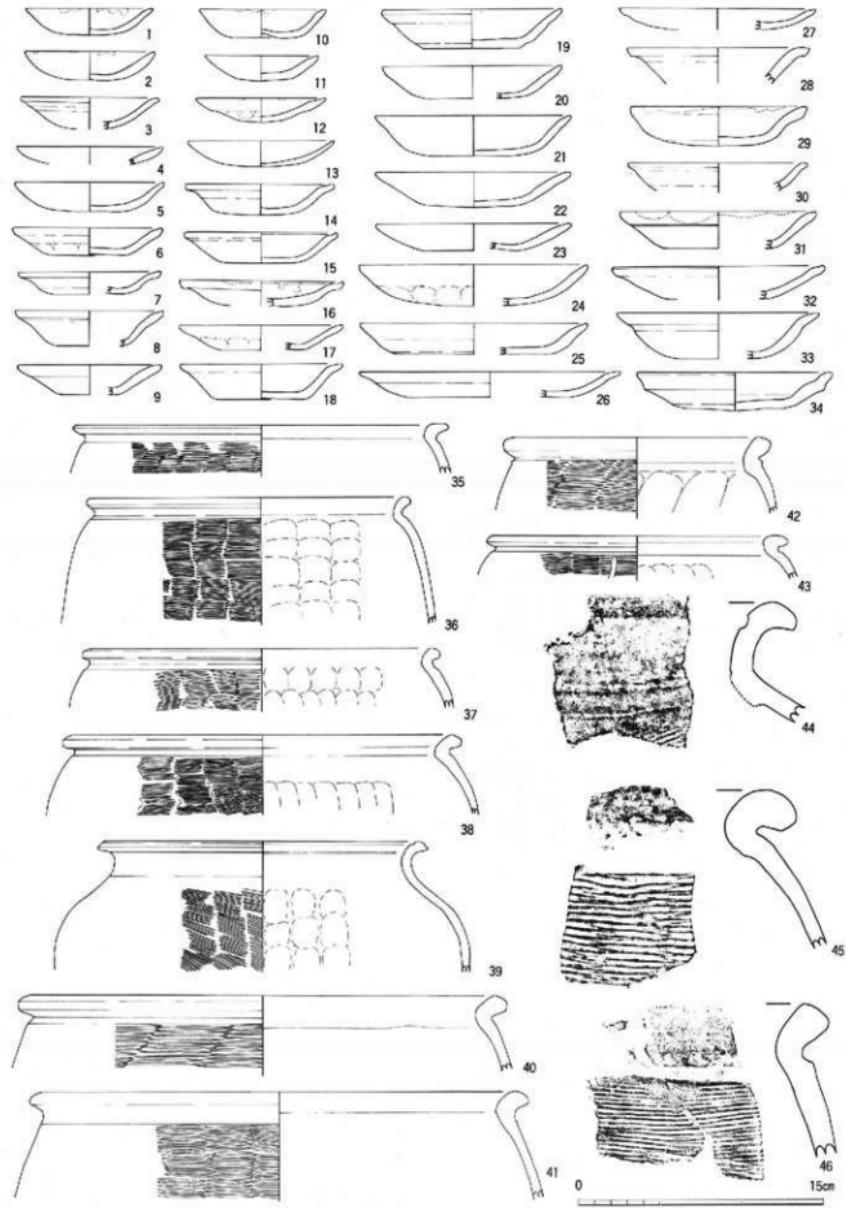
図版6 E地点1区出土遺物 1~30・33~36(1/3) 30~32・37~42(1/6)

SD001(9~39) SD002(4~26) SD003(14) SK005(10) SK014(3) SK021(21) SK029(36)
SD030(1~8~31~33~34~40) SE073(15) P6(37) P56(18)



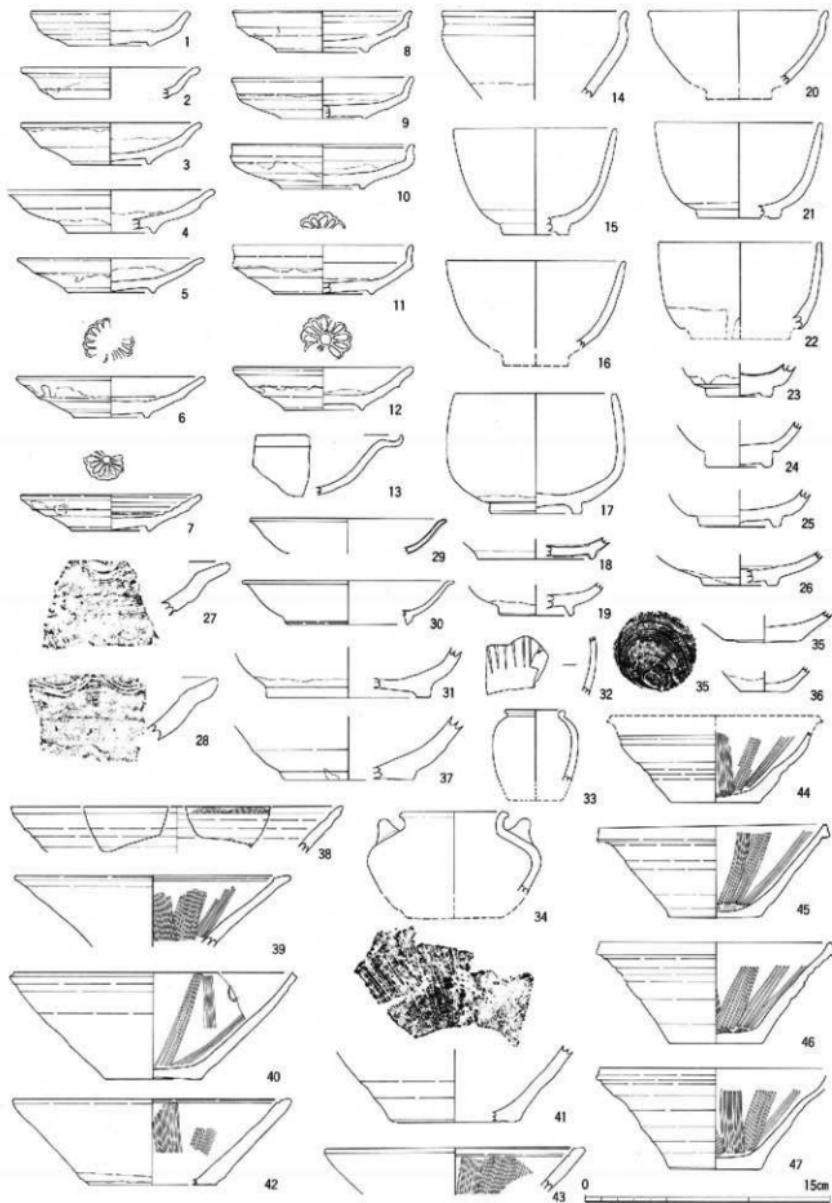
図版7 E地点1区出土遺物 1~21・23(1/3) 22(1/6)

SD001(11-16-23) SD001 SD003 SK005(22) SE007(1-12) SE015(2~10) SD030(17-19)



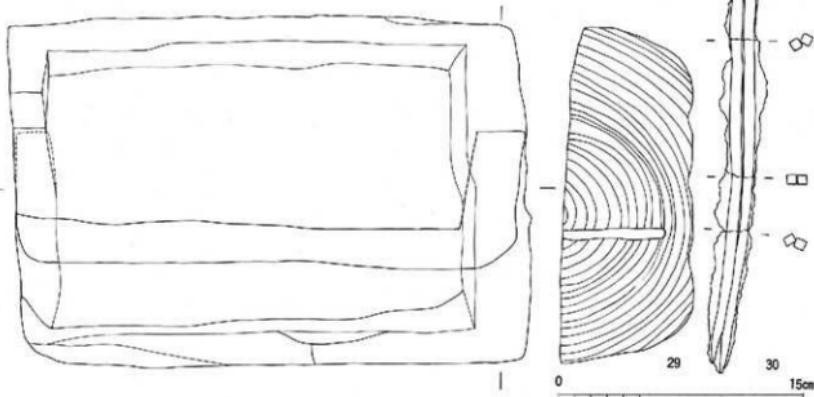
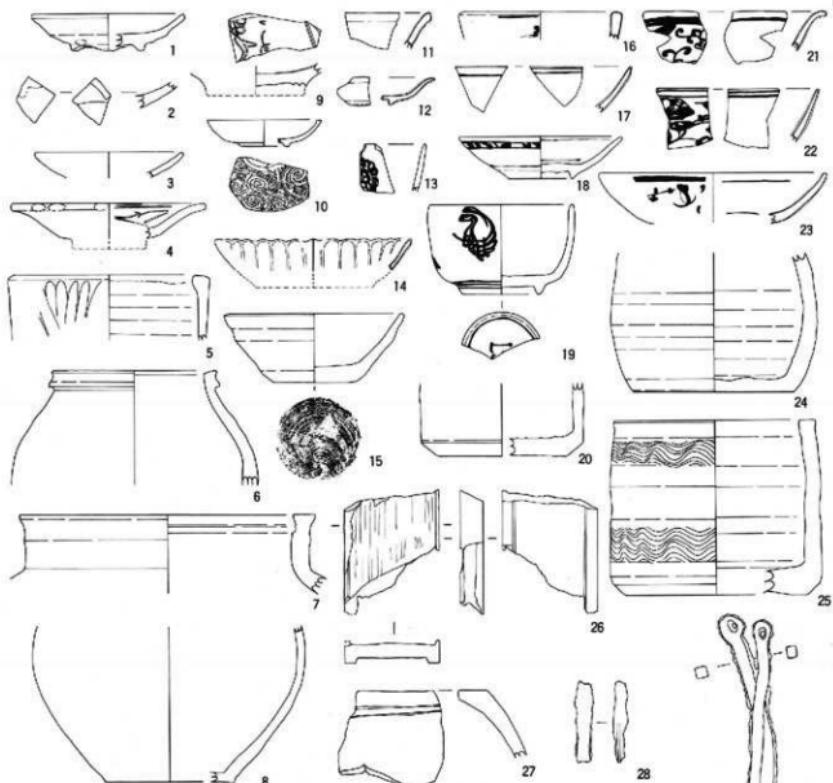
図版8 E地点3区出土遺物 1~34・44~46(1/3) 35~43(1/6)

SD201(4・19・23・37) SD202(10・32・33・44・45) SD211(36・42・46) SD213(42) SD216(22・35) SK223(3)
SK224(40) SK225(26) SK235(1・2・9・11) SK275(16) SK285(5) SK286(8) SE287(6)



図版9 E地点3区出土遺物 1~31・33~36・41(1/3) 32~37~40~42~47(1/6)

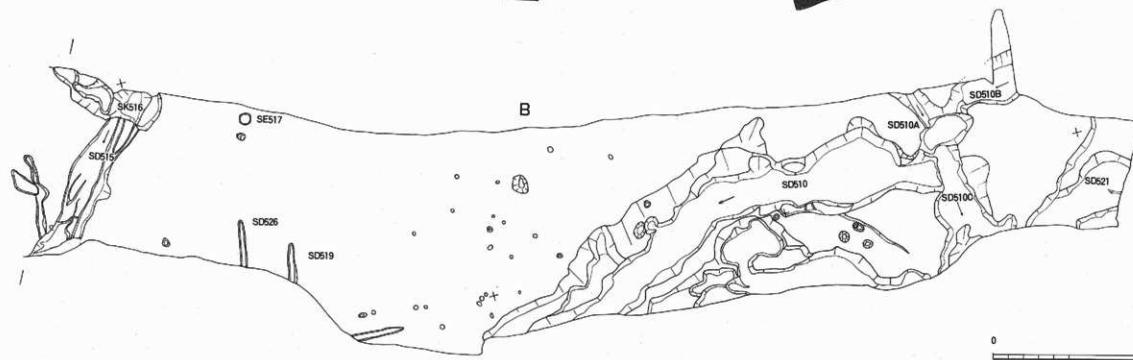
SD201(3・5・6・16・35・39・41・43) SD202(24・36) SD205(2) SK211(37) SE226(1・30・34) SK227(8)
SE228(12) SK252(45) SK254(15) SK255(9・44) SK256(21・47) SE271(38) SD276(4・29・31・46)



図版10 E地点2・3区出土遺物 1～5・7・9～28・30(1/3) 6・8・29(1/6) 4・5のみ2区出土
 SD201(6・19) SD202(28) SD207(1) SD211(30) SE226(6・8・14・23) SK252(15) SK255(7) SK256(2)
 SK259(6) SD276(6・12) SE287(29) P5(24)

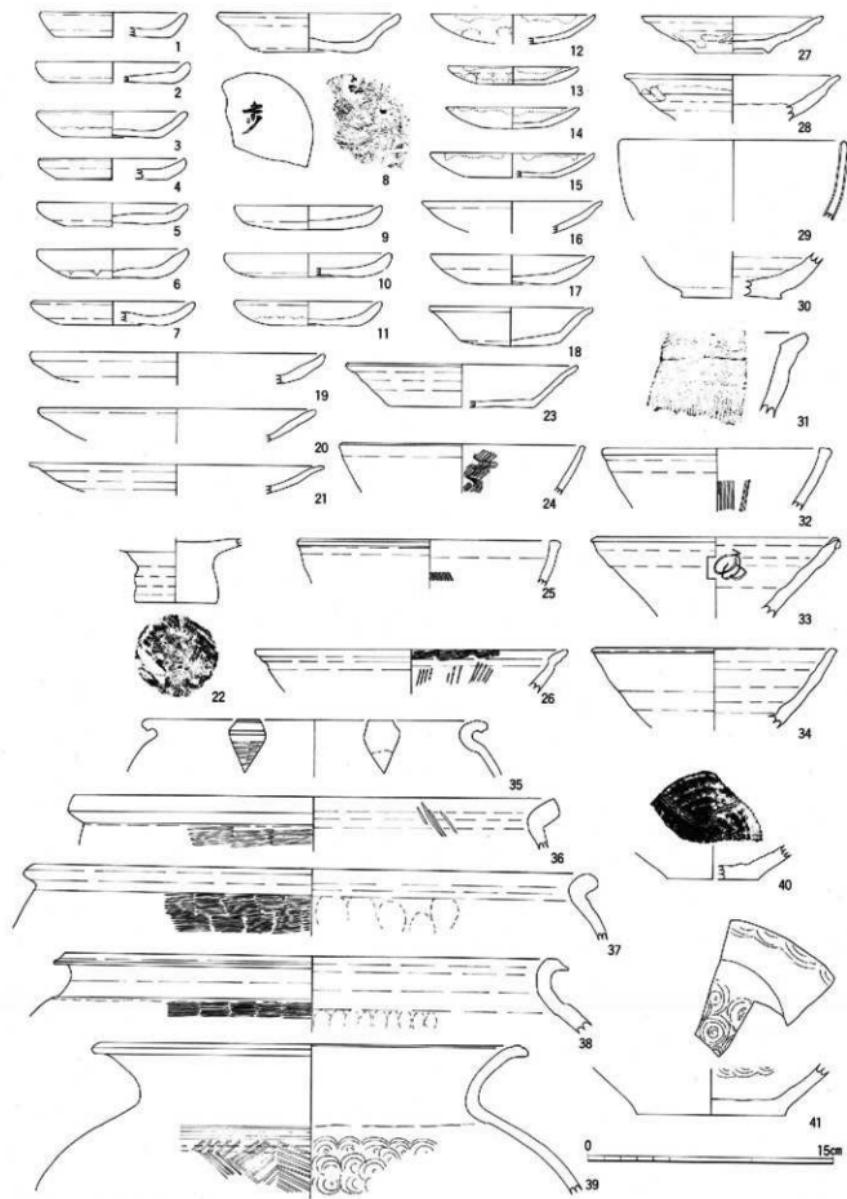


図版11 E地点3区発掘区 (1 / 250)



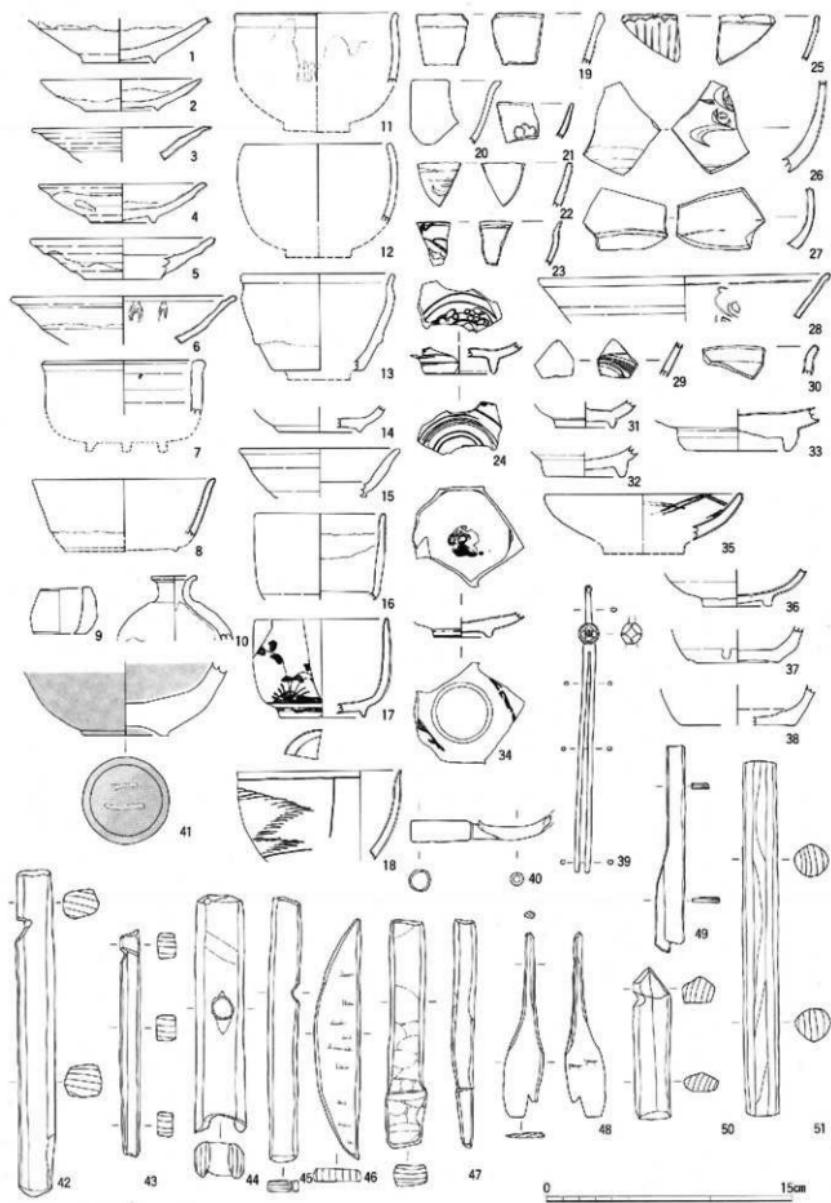
図版12 F地点発掘区 (1/250)

0 15m

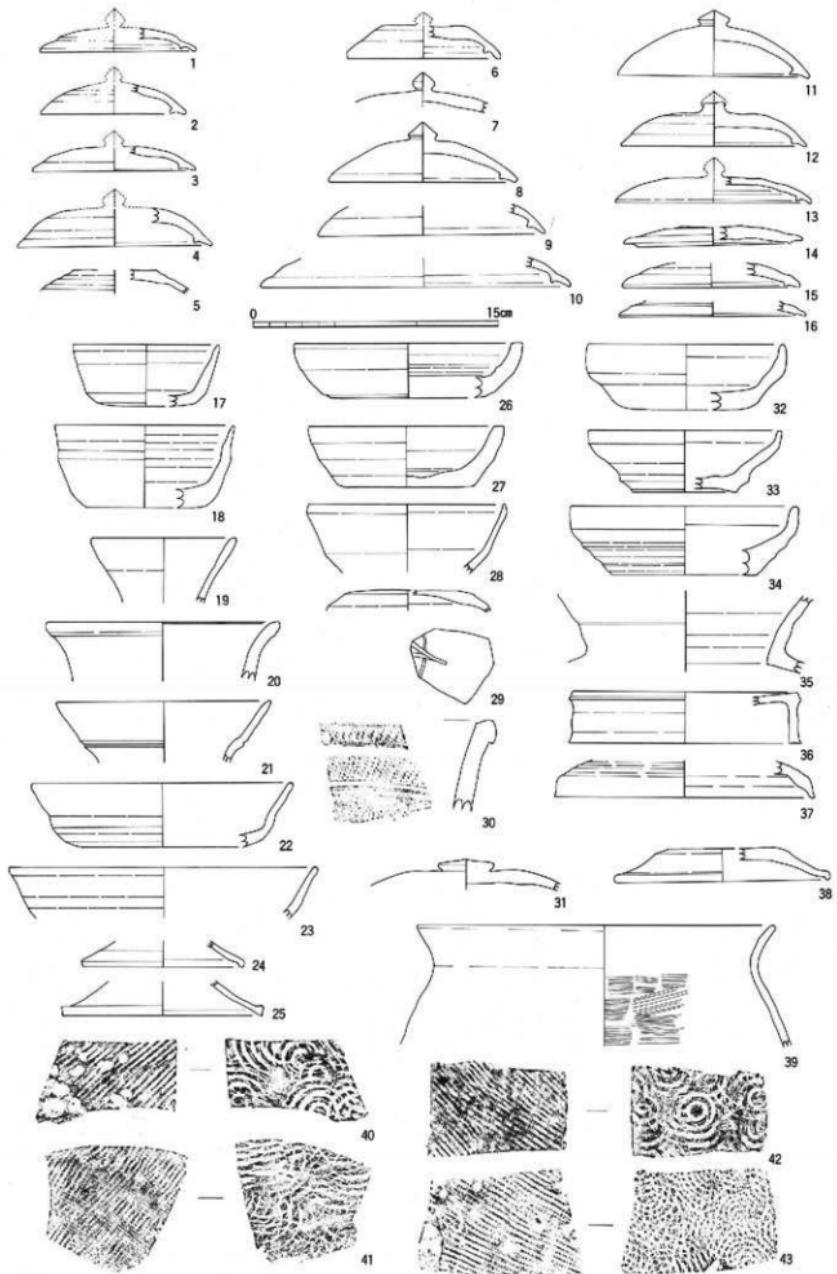


图版13 F地点出土遗物 1~23·27~31(1/3) 24~26·32~41(1/6)

SD501(27·40) SD504(37) SD510(8·29·31) SD511(1~7·11·19·33·34·39·41) SB523(39)

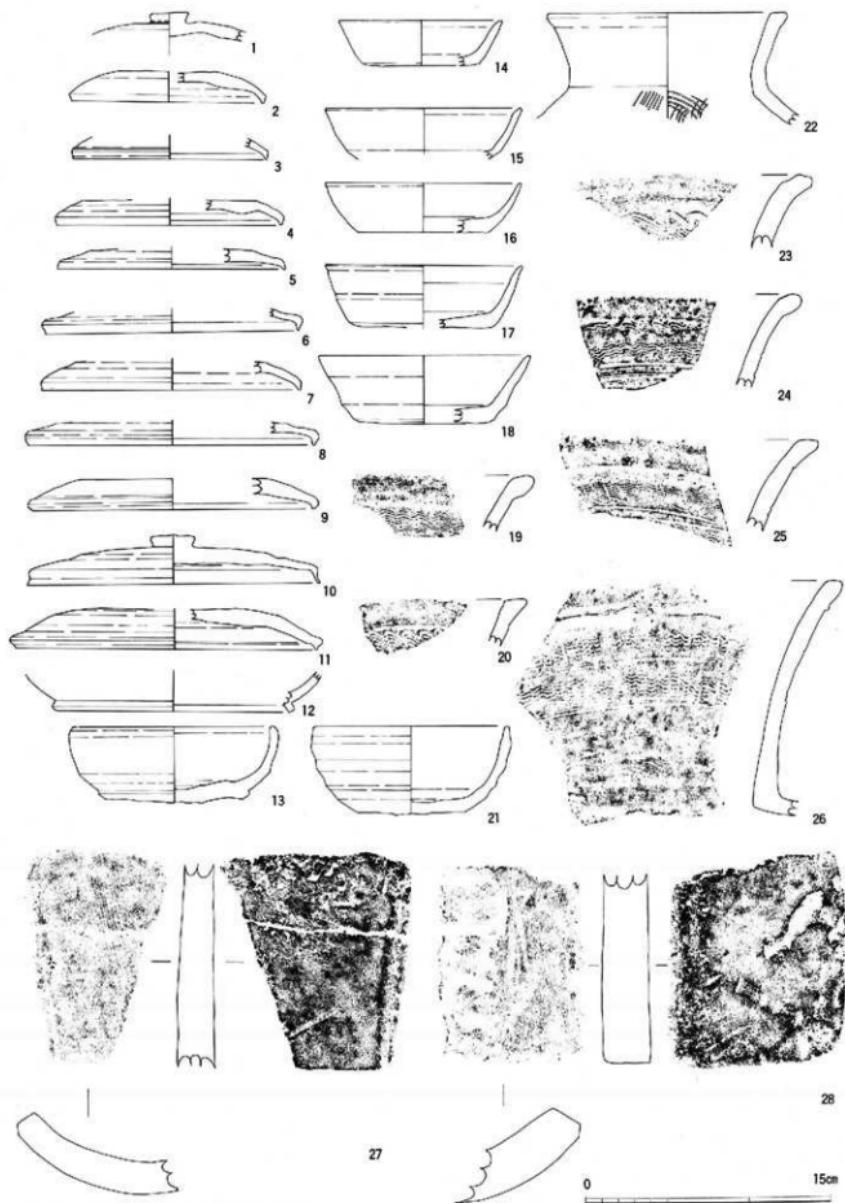


図版14 F地点出土遺物 1～5・7～51(1/3) 6(1/6)
SD501(1) SE506(47) SD510(9・30・41・45) SDS12(29) SD519(37)



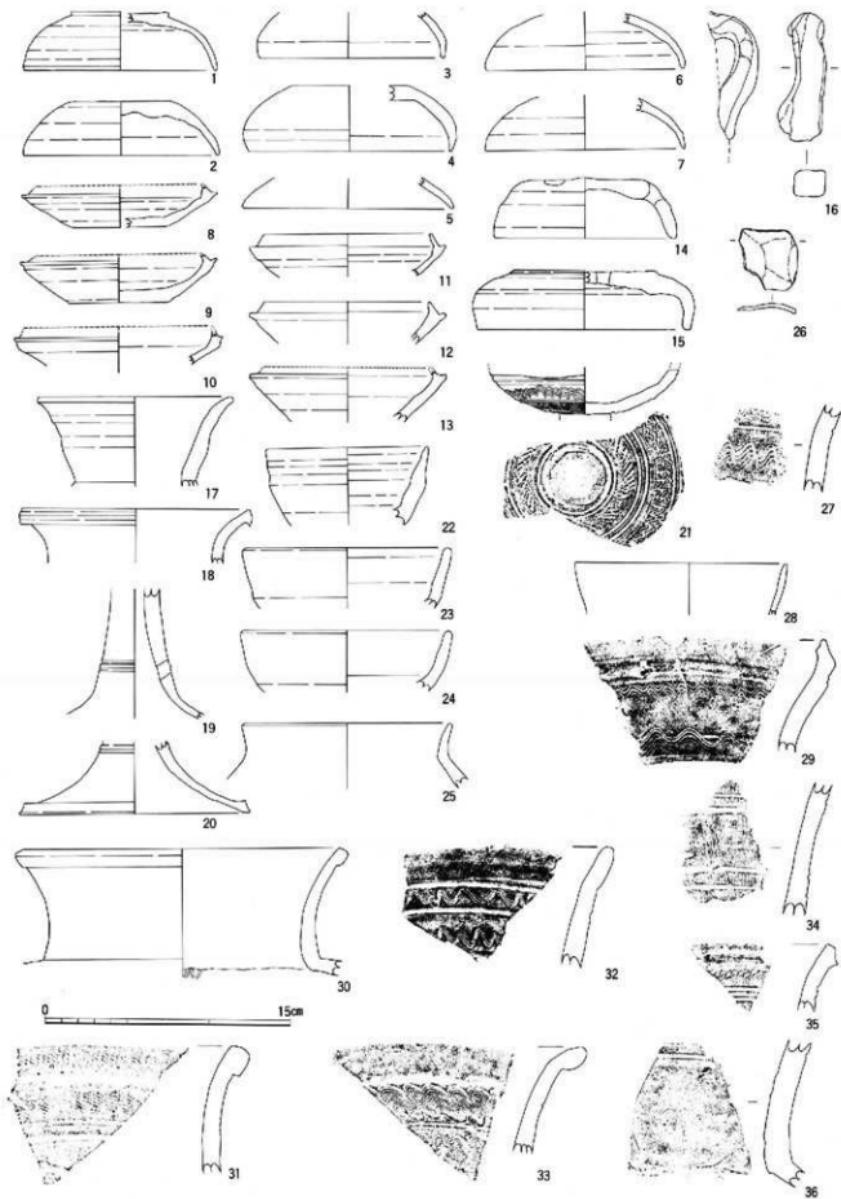
図版15 中山王墓跡群出土遺物 (1/3)

A地区(1~25・27~32・35・36・38) B地区(40~43) D地区(39) トレ4 No 6 (26) トレ5 No 5 (33~37) トレ6 No 6 (34)



图版16 中山王墓群出土遗物 (1/3)

B地区 (1~12·14~18·20·23·27·28) C地区 (13·19·21·24~26)



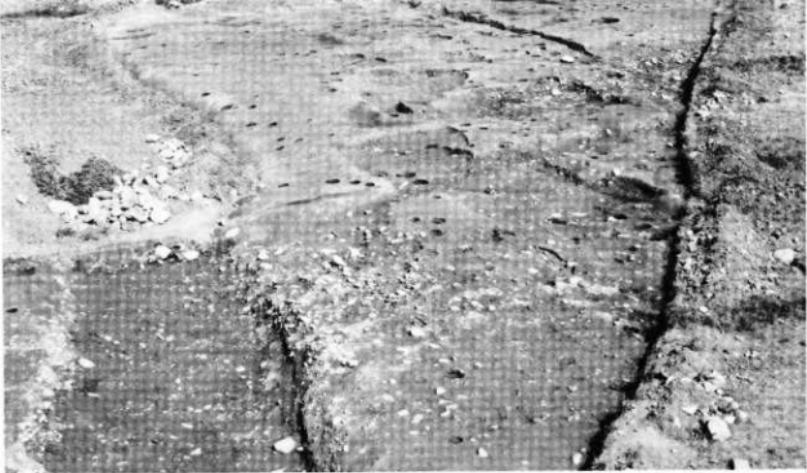
図版17 中山王墓跡群出土遺物 1~29・31~36(1/3) 30(1/6)

A地区(1~11・14~26・29~33・36) トレ4 No6(27) トレ5 No5(12~13・28~34) トレ6 No6(35)



図版19
C地点2区

1. 西より



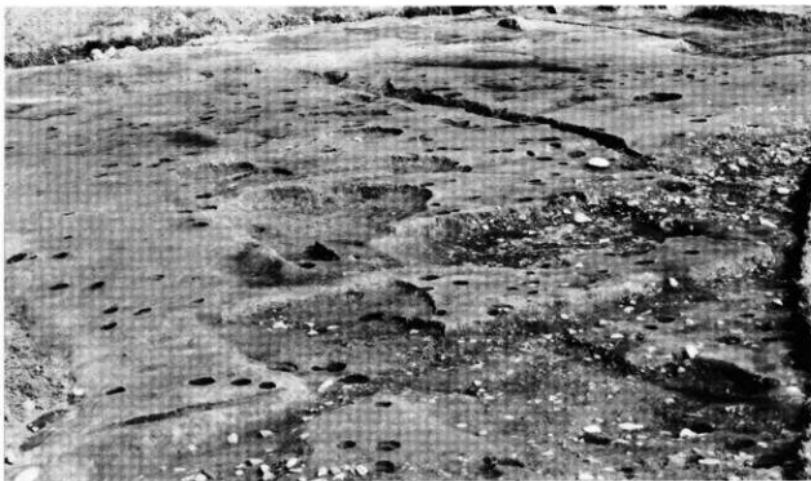
2. 東より



3. SD 001
東より



図版20
C地点 2区



図版21
E地点1区



1. 東より



2. 西より



3. 南より

図版22
E地点1区



1. SD 001
南より



2. SD 002
南より



3. SD 003
東より

図版23
E地点1区



1. SX 033
西より



1. SE 013
西より



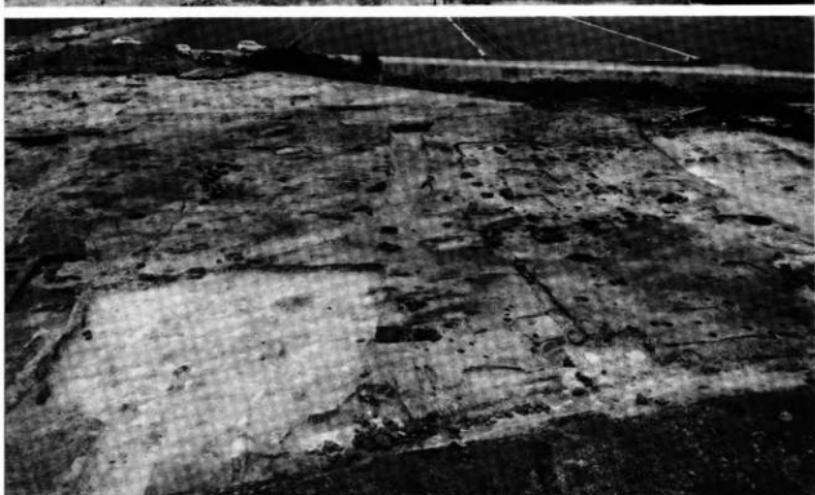
E地点2区

3. 北より

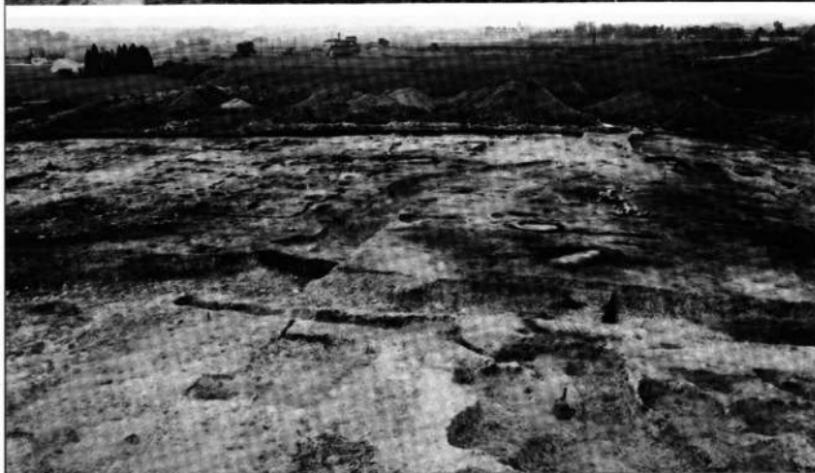
図版24
E地点 3区



1. 東より



2. 北より



3. 南より

図版25
E地点 3区

1. 建物群
西より



2. SB 289
北より



3. SB 290
南より

